空の玉座

雨木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
空の玉座

【Ｎコード】
Ｎ１８２０Ｍ

【作者名】
雨木

【あらすじ】
肥沃な大地に穏やかな気候。その国は恵まれていた。ただ一つ、愚王に統治されているということを除けば。
その国の西の果てにある閉ざされた小さな村から青年が旅立つ時、物語の扉が開かれる――。

剣と魔法……はないけど、それに近しい特殊能力が織り成す、中世ヨーロッパ風ファンタジー。

（タイトルは「からのぎょくざ」です。「そら」ではない）
現在更新亀の歩みの如く……、それでも良いという希少な方はどうぞお付き合い下さい。

序幕

小さい頃、大人たちには内緒でよく邸宅の裏にある野原を三人で駆け回って遊んだ。

なぜ秘密であったかと言えば、自分と妹はそもそも、村人たちのどのような人とも身分が違ったのだ。

小さな村であるのにも関わらず、徒歩は禁止で、馬車か牛車が基本だった。

それも数人の護衛がついてやっと外に出れるという窮屈なものだ。

そんな訳で、俺たち兄妹は自分たちが特別扱いされ、他の者とは気軽に口を聞いて良い立場ではなかった。

当然友人が出来るはずもない。

ちっぽけな子供であった自分にできることと言えば、せいぜい召使いたちの子供がたまに邸宅の離れにいるのを見つけては、コッソリと話しかけるくらいであろう。

それでもたいていの子供は初めからこちらのことを知っているらしく、完全に恐縮しきった面持ちで、到底友人になれそうにない雰囲気だった。

しかし、そんな中でも物怖じせずに身分などお構いなしで話しかけてきたのが、唯一の友人にして親友のカインだ。

カインは自分たち兄妹が、村の領主の子供であるなどと微塵も知ら

ぬ（実際には充分承知であっただろうが）様子で接してくれた。
妹のミアと同じ年なこともあり、俺は親友であると同時に、弟ができたような気がしていた。

そして次第に三人は大人になり、今年ついに兄が成人の一つ手前である崇人（スジン）の儀を受けた。

カインたちも成長し、十六歳になる。
しかも驚くべきに、と言うか当然と言うか、ミアとカインはいつの間にやら恋仲となっていたのだ。

微笑ましくも初々しい恋人たちに、祝福の目を向けるのは兄であるイズミだけであったが、彼らは幸せだった。

大切な人たちと共に居られたのだから……。

第一幕：旅立ち１－１

初秋の風が金色の麦の合間を疾駆し、やがて一人佇む青年の耳に優しく囁きかける。
そして朝日に反射して輝く麦穂と、同じ色に煌めく髪を揺らして青年の身体をくぐり抜けた。

その時、微かに草を踏みしめる音が聞こえ、おもむろに後ろを振り返る。

「ミア、カイン」

そこに立っていたのは自分と同じ色の髪を一つにくくった妹と、妹の恋人であり、自らの親友だった。

二人はそれぞれの手をしっかりと繋ぎ、空いている方の手にわずかばかりの路銀が入った、小さな袋を手にしていた。

「二人とも、誰にも見つからずにこれたようだね」

口元を引き結んだ二人は、同じようにこくりと力強く頷いた。
それを見ると、イズミは手で輪を作り、高らかに響かせた。

指笛の音が遥か彼方の山に消えゆく頃、微かにだが羽音が聞こえた。
巨大な鳥が羽ばたくようなその音は次第に大きくなり、何者かが彼らの頭上を飛び越えて音もなく着地する。

眼前に降り立ったのは一目で美馬と分かる、二頭の黒馬であった。

ただ、普通の馬と違うのは身体が比べて一回りほど大きいことと、更にはその背に二対の巨大な翼が生えていることだろう。

黒馬たちが天馬と言われる妖魔の一種であることを知らぬものはいないだろうが、実際に乗ったことがあるとなると、それは一部の限られた人間に自然と限られてくる。

妖魔でありながらその性質は神獣に近く、存在自体が稀だ。しかも、めったに人に懐かないので、騎獣としての絶対数が多くないのも道理だ。

そんな特性を持つ天馬たちは、まるで母親に甘える子供のように鼻面をしきりにイズミに押し付け、愛情表現を示す。

「レヴォルト、ルティオン。そろそろいいかな…？」

二頭の巨馬を制して言うと、名残惜しげにではあるが、おとなしく一歩ずつその身を引いた。

「レヴォルトにはミアとカインを乗せて王都の手前のハダムの街まで飛んで欲しいんだ。頼む」

頭を下げるイズミにならい、ミアとカインも慌てて頼み込む。

「兄さんを乗せるのでなくて、乗せ甲斐がないとは思うけど、どうかお願い」

「僕からも、お願い」

レヴォルトは頭を下げた後ろの二人を満足そうに眺め、鼻息をイズ

ミに吹きかけて了承の意を示す。

「ありがとう、レヴィ。今日は二人の門出なんだ。絶対うまくいかせたい…」

気に入らない相手を無理に乗せたら、背から振り落としてしまうほど気位の高い馬たちだ。

了承してくれて本当に助かった。

「ルティオンには俺を王都まで連れていって欲しい」

光彩を散らし、銀に輝く天馬特有の瞳を覗き込むと「お安い御用」と言わんばかりにいななく。

「ありがとう。――それじゃあ、二人はレヴィに乗って。ハダムまではちゃんと送り届けるから」

「イズミ…。僕たちの我が儘に、君まで付き合わせて、本当にごめん」

「今更だよ、そんなの。俺は二人には幸せになってもらわなきゃいけないの。あんなクソ親父の都合で二人が離れ離れになるのはイヤだし、俺自身親父の跡継いでこんな村の領主になるなんてまっぴらだ」

だから……、と続ける。

「家出は自分の都合。カインが重荷に感じるならそれは筋違いってモンでしょ。たまたま二人の駆け落ちと同じ日に巡り合わせただけ、ね」

「兄さん……」

ミアが瞳いっぱいに涙を溜めて、うるうると見上げてくる。
そんな妹の頭を軽くなでて笑いかける。

「兄さんは禁止だよ。これからミアはハダムの街のオミドール商会の娘、ミフィリアになるんだから」

「ミフィリア……。花の名前ね」

「んでもって、カインはミフィリアの許嫁で荷馬車御者のアベル。いいね、これからはミフィリアとアベルとして過ごすんだぞ」

二人の頭を再びくしゃりとなでる。

「それじゃあ、兄さんは？　イズミ兄さんは私の家族ではなくなってしまうの？」

心配そうに見つめるミアから視線をそらしてルティオンの背を優しくなでる。

「俺は吟遊詩人にでもなるさ。街から街へ、人から人へ、風のように通り過ぎ、春の日差しのような詩を奏でてみるよ」

ミアの悲しみを吹き飛ばすように、ワザと軽めに言ってウィンクをしてみせる。

その不器用なウィンクに、ミアとカインは思わず笑みをこぼす。

「名もなき吟遊詩人さん。それじゃあ季節の折りにはハダムのミフィリアとアベルを訪ねてきて下さる？」

「喜んで。その時にはきっと、アベルとミフィリアの素敵な恋の叙情詩を詠ませてもらうよ」

「それにはまず、そろそろ出発しなければね。早くしないと村の人たちが起きる」

カインが白じんだ空を指差して言うと、イズミは軽く屈んでくれたルティオンへと騎乗する。

それに続いて、カインがレヴォルトの背に乗り、助けを借りたミアがカインの前に座った。

鞍（くら）も鐙（あぶみ）も装着していないが、天馬の首にしっかりとつかまるだけで不思議とバランスを崩すことなく乗っていられる。

二頭はそれぞれの騎乗主が自分の首につかまったのを確認すると、助走のために数メートル駆けてから、軽やかに地を蹴り飛翔する。

ぐんぐんと高度を上げ、イズミたちの村は遥か下方に豆粒のように見える。

天馬は二、三はばたくと後は風に乗って滑空し、僅かな振動もなく飛ぶ。風もその巨体が風自体を割るように飛んで遮る。

重ね着のおかげもあり、秋の初めの風の冷たさも、微かに肌寒さを感じるのみで済んでいた。

1―2

少し飛ぶとやがて、大陸を二分するように南北にそびえ立つ、テム山脈が見えてきた。

最も高い所は白く、夏でも溶けぬ雪を有するが、ルティオンたちはイズミたちを気遣い、比較的低い所を飛んでいる。

真下には紅と黄に色づいた山を拝し、その上を越えてゆく。

見ると、前方を行くレヴォルトの背に座るミアが言葉もない様子で、その雄大な景色に圧倒されている。

そのミアをカインは後ろから腰に手を回し、決して落ちないように支えていた。

（あの様子なら、きっと二人はうまくいく……）

根拠もなく、そう思えた。

身分を捨て、一から始めることがどれだけ難しいかなど、想像するに容易い。

ましてや、まだ二人とも成人にまで後三年もある十六歳だ。年若い二人には多くの困難が待ち受けているに違いない。

そのためにこそ、イズミは信頼できる僅かなツテを頼って、ハダムに住むオミドール商会の夫婦に後ろ盾となってもらうように頼んだのだ。

素直で正直な、誰にでも愛される二人だ。きっと周囲が彼らを支え

てくれる。いつか幸せな家庭を築けるほどになるまで。
それに何より自分が、二人を陰から支えなければならない。
自分の幸せを捨ててでも……。

（俺は構わない。これは自ら選んだ道だから）

しかし、あの二人は違う。
本人たちはそうとは思ってないだろうが、二人の人生は自分が歪めてしまったようなものだ。
身近で二人を支えてやれないのが何とも悔やまれるが、これから自分がやろうとしていることを考えれば仕方がない。
守るもの、執着するものが当然ない方がいざという時に危険が少なくてすむ。
そんなことを成そうとしているのだから、やはり二人は自分の近くにいない方が良い。

そんなことを鬱々と考えていると、やがて森の中に水場でも発見したのか、レヴォルトが先に生い茂る木々の中に入っていく。
その背を追ってルティオンも降下する。
森の開けた所に降り立つと、二頭は翼をたたみ、並んでゆったりと歩き出す。
「兄さん、ルティオンたちはどこに？」

「喉が乾いたんだよ。水場がこの辺にあるみたい」

「天馬の嗅覚や視力は人間の数十倍もあるんでしょ。凄いね」

カインは嬉しそうにレヴォルトの首をなでる。

それにレヴォルトは嫌がる様子も見せず「あら、分かってるじゃない」と唇を震わす。

数十メートル進むと、木々の一層生い茂った陰に小川がさやさやと流れていた。

水はこれ以上なく澄んでおり、水底を泳ぐ魚のウロコが虹色の光彩を放つのまで鮮明に見えるほどであった。

1―3

三人と二頭は喉を潤す。

太陽がてっぺんまで昇ると、秋ながらまだジリジリと身を焼くような日差しが身を焼く。

早朝とは違う顔を見せる太陽から身を守るべく、木陰で小休憩をとることになった。

ミアはスカートの裾をたくしあげ、小川の中でハシャいでいる。ミアに寄り添うようにレヴォルトがついているから危険はないだろう。

反対にカインはそれを見守るように草の上に腰をおろしている。

「なんだか夢みたいだ…」

カインがそわそわとしながら呟く。

「うん？」

イチイの木に寄りかかって、風を感じていたイズミは、薄く片目を開いた。

「ほら、何だかスッゴくうまく行ってるから。もしかしたらこれは夢で、僕は今もベッドの中にいるのかもしれないなぁ、って」

「ははっ。だいじょーぶ！　これからもっと夢みたいな生活が待ってるから。……でも、夢じゃない」

「夢じゃない……」
「そう。現実、なんだ」
イズミの言葉にカインは「現実、現実か……」などといまいち信じきれてないような面持ちで繰り返す。
その横で、イズミは再び気持ちよさそうに目を閉じる。ミアの嬉しそうにはしゃぐ声と、レヴォルトの合わせていななく声が何とも言えず、耳に心地よい。
見ればカインも目を細めてその様子を見ていた。
「……、……」
カインの呟きは、風にさらわれて聞こえなかったが、きっと思うことは同じなのだろう……。
しばらくして、ミリアが水から上がると、イズミはゆったりと立ち上がって言った。
「さて。そろそろ行こうか――って、アレ？」
キョロキョロと辺りを見回す。
「ルティオンは？」
見るといつの間にかイズミを乗せてきた黒馬の姿が見えなくなっていた。

「そう言えば見ないね。どこ行ったんだろう」
「ちょっと探して見ましょうか。カイ……アベル。私はあっちを見に行くから、川の上流の方をお願い」
「あ、あぁ、うん。そうだねミ、ミフィリア」
ぎこちなく微笑みあう。
「あー……。二人はレヴィと一緒に川下を頼むよ。川上は俺が一人で見てくるから」
「に、兄さん？」
「いやいや。若い二人を引き離しちゃぁ、ダメだって。俺、馬に蹴られたくないからね」
「〜〜〜っ！！　イズミぃっ！！」
アハハと高らかに笑いながら、イズミは川上に駆けて行く。
チラリと振り向くと二人ははにかみながらも手をつなぎ、川下に歩いて行くところだった。
その二人の後ろにはレヴォルトがきちんと着いて行く。

1―4

一人小川に沿って川上へと歩いてきたイズミは、途中でクナイの実が成っているのを見つけた。

クナイの実は栄養価が非常に高く、また皮は水で揉んで患部に貼り付ければ治癒にも役立つ。

食べて美味しい、貼って安心というなんともお役だちな実なのだ。

イズミはのん気にその実をいくつかもいで、背負っていた袋に無造作にしまい込んだ。

実際、ルティオンがいなくなったのはそれほど心配することでもない。

聴力の良いルティオンたちはイズミの吹く指笛を聞き分け、かなり遠くにいても即座に駆けつける。

その上、本気で呼ばなければいけないときにはレヴォルトがいる。まだ良く知られてはいないが、天馬には彼らにしか聴こえない特殊な伝達方法があるらしく、それによって細かな情報伝達が可能だった。

要は呼ぼうと思えばいつでも呼べる状況にあるということだ。

それをしなかったのは、あの二人のためだ。いや、厳密に言えば自分のためだったのかもしれない。

天馬の足をもってすれば、あと三時間もあればハダムに着いてしま

うだろう。

そうすれば、しばらくは二人に会うことはなくなってしまう。
別れがたく、イズミはまだ二人とつながっているという実感を持ちたくてこのようなことをしているのだ。

「はは……。我ながら子供じみてる」

苦笑を禁じ得ない独白に応えはない。

「――それにしてもルティはどこまで行ったんだ」

森の奥まで来たのだが、一向に愛馬が見つかる様子はない。

足跡も見当たらないし、こちらには来ていないのか、と半身を翻しかけたとき……首筋に冷たいものを突きつけられる。

「――!?」

「おぉっとォ。動くなよボーヤ」

かろうじて見えた切っ先は、鈍く光っていた。
ナイフだ。

イズミは気付かれないように腰元に手を伸ばす。

「ボーヤ一人？　んなワケねぇよなぁ。この森に案内人（コンダクター）もなしに入るなんて自殺行為だしなぁ」

背が高い男らしい。イズミより優に頭一個分高い位置で、ペラペラと一人しゃべり続ける。

「何しにこの森に入った？　事と次第にによっちゃあボーヤとは言え、容赦しな――ん？

「……じゃ…」

「ん？　ボーヤなんか言った？」

耳を近づけてくる気配を感じ、思いきり後ろ蹴りを放つと、間合いを取る。

「ボーヤじゃないって言ったんだ、よ！！」

気合いと共に石を続けざまに二擲、三擲する。大柄な男は叫んで飛び上がった。

と言うより……。

「うそぉっ！？」

男は軽々と跳躍して、木の上に飛び乗った。

「四、いや五メートルはあるよね？」

思わず口に出して確認してしまう。

「ふうぅぅ～。び、びびったぁ！！　ボーヤ不意打ちは禁止だぜっ」

木の上で胸をなで下ろし、わめくその様はまるで猿だった。

「そもそもキミが不意打ち禁止って言える立場じゃないでしょっ。っつーか、ボーヤじゃないっ！！」

イズミはまた続けざまに石を投擲する。

「うぎゃー！　ちょっ、ちょっちタンマ！」

石だけでなく木の棒やら砂やら、投げられるものは全て投げつける。お猿の大将は木の上でぴょんぴょん跳ねながら避けている。驚嘆すべき身体能力だった。

「ズルっ！　降りてきなよっ」

腕を振り回して言うと、男はナイフを鞘に戻す。そして予備動作もなく地面に着地した。

「本当に降りてくるとは……。キミ案外素直だね」

油断なく辺りを見回しつつ、イズミは腰元に手を持っていく。武器をすぐに出せるようにフォルダーの留め具を外しておく。

「それで、人にいきなり刃物突きつけといて何なのさ。事と次第によっては容赦しないよ」

1―5

そんな上位に立って言える立場ではないが、あえて強気に先ほどの男の言葉をそっくりそのまま返す。
ここは牽制し、相手の出方を伺う。

第一、容赦しないところで、五メートルもの高さを助走なしで飛ぶようなデタラメな身体能力の持ち主に勝てるとは思わないが。

「こちとら愛馬が迷子で困ってるただの旅人だってのに……。いきなり刃突きつけられて見逃せるほど俺、人間できてないんだよね」

とは言いつつ、まだ武器は腰のフォルダーから出してない。
ギリギリになるまで暴力に訴えることはしたくない。何も甘さからそのような考えをしているわけではない。ただイズミは後々まで遺恨を残すような真似はあまりしたくないのだ。

できれば引いてくれることを願いつつ、臨戦態勢を取る。

「あ？？なんだ、王都の兵士じゃねぇのか。そうかそうか、こりゃスマン。俺の勘違いだったわ」

勘違いと言った男は武器を下げて、頭を掻く。

「あいつら俺らを見るとすぐに悪しき血族だなんだって言いやがんだ。ムカつくよなー」

あっけらかんと言って笑う。急に友好的な態度で近づいてくる。
警戒は解かないままでフォルダーから手を放した。

「本当に悪かった。人違いだったんだけど、怪我ねぇか？」

言って男はイズミのアゴに手をかけて、上を向かせた。ナイフを当てていた部分が切れていないかどうかの確認なのだろうが、イズミは手を振り払う。

「問題ないから。分かったならもういいよね。人違いでその辺の人に襲いかからないでよ。まぁ、二度と会うことないだろうから関係ないけど」

きびすを返し、先ほどミアたちと別れた場所へと走り出す。

男が追ってくる様子はない。

二人と合流したらレヴォルトに頼んでルティオンを呼んでもらおうと心に誓うイズミだった。

「兄さんっ！！」

水場に戻るとミアがレヴォルトと共に駆け寄ってきた。

胸の中に飛び込んで泣きじゃくるミアをなだめ、何とかして事情を聞き出そうと試みる。

しばらくすると少しずつではあるが、ミアはしゃくりあげながら話し始めた。要約すると次のようなことらしい。

あの後、二人がルティオン探しに川下に向かうと、鎧を着た一群（おそらく国王軍だろう）が軍行していた。

妙に物々しい雰囲気だったのでミアとカインは物陰に潜んでその場をやり過ごそうとした。

しかし、ちょっとした拍子に物音を立ててしまい兵士に気付かれてしまう。

見つけた二人を取り囲んだ兵士たちは口々に、森の民がどう。とか悪しき血族云々。などと言い始めた。

しまいにはレヴォルトが天馬だと知られてしまい、どこからさらってきただの、盗人が、だの言われたそうだ。

二人は拘束されそうになったが、カインの必死の抵抗によって、隙ができた一団の合間をレヴォルトがミアを背に駆け抜けてきたのだと言う……。

「そう。それじゃあカインは今もその軍隊に捕まってるんだね」

「兄さん、カインを……カインを助けて。お願い」

1―6

可愛い妹の必死の頼みを断れるはずがない。

そもそも、頼まれなくても二人をハデムに無事送り届けるまでは、何が何でも守りきらなければならないのだ。

イズミはミアを落ち着かせるために頭を優しくなでてやる。

「大丈夫。必ずカインは助けるから。ミアは先にハデムに行ってるんだ」

「え……？　や、やだよ……。私、カインを待ってるっ」

泣いて訴えるが、さすがにこればかりはイズミも譲れない。厳しい目を向け、無情とも思える言葉を放つ。

「残念だけどミアにはどうすることもできないよ」

真っ赤に腫らした目を見開いて、ミアは信じられないものを見るようにイズミを見つめる。

「戦うこともできない、逃げるにも足手まとい。今のミアにできるのはハデムで“ミフィリア・オミドール”として“アベル”を待つことだ」

「私にもできることは……」

「ないよ。何にもない。だから、ミアはハデムで俺を信じて待って

なさい。いいね」

柔らかに、だが厳然たる命令を下す。

ミアは悄然とし、うつむいているが微かに首を振り、肯定の意を示したのがわかった。

「レヴィ、予定が変わった。ルティオンを呼んで。その後、悪いけどミアをハデムまで頼む」

首筋をぽんぽんと軽く叩いて指示を出すと、レヴォルトは「分かった」と言わんばかりに尻尾でイズミの足をなでる。

「送り届けた後の行動はルティに伝えさせるから」

レヴォルトはぶるるんと鼻を鳴らす。

「それじゃ、ミア。元気で、きっとまた会えるよ。カインのことも心配いらない。すぐに追いつかせる」

そう言うとミアの返事も待たずにイズミは駆け出す。川下へと――。

1―7

きつく後ろ手に巻かれた縄を何とか緩めようと奮闘するが、一向に緩まる気配を見せない。

カインは脱出をなかば諦めかけていた。

（森の民って何なんだ？　勘違いだって分かったら放してもらえるのかなぁ。

あ、でもその場合あの村に戻されちゃったりするのかも？　うっわ、そしたらヤダなぁ。僕、ミアと一緒にいたいし。そう言えばミアはちゃんと逃げ切れたかな。うーん……心配だなぁ）

次々と溢れ出る思考の波に飲み込まれがちになるのを、理性でなんとかとどめる。

ともすれば嫌な考えに支配されてしまいそうになるのだ。

嫌な考えからは嫌な結果しか生まれない。

これを持論に掲げるカインとしてはもはや『頼みの綱＝イズミ』に賭けるしかない。

（それにしても――）

先ほどから兵士の一団が動く様子がない。

果たしてこの人たちの目的はなんなのかと耳を澄ませて、兵士たちの会話を盗み聞く。

「陛下は何をお考えなのだろうな。このままではこの国も終わりだ……」

「ああ。お世継ぎもいらっしゃらないし、宮廷内は陛下におもねるばかりの姦臣が巣くう場となり果てている様子。国民の不信感は日々高まるのも当然というものだ」

「ああ。それに聞いたか？　陛下は今度、リュミエス帝国に宣戦布告なさるおつもりらしいぞ」

「まさか……！？　ウィグノにヒスダン。この上リュミエス……。この国の周りは敵ばかりになってしまう」

「はぁ……。先の賢王がお懐かしい」

二人の兵士が同時にため息をつくと背後から叱責の声が飛ぶ。

「シッ――！　お前たちっ。滅多なことを言うもんじゃない」

「小隊長殿っ！！　も、申し訳ありません」

どうやら上官らしく、兵士たちは慌てて居住まいを正す。

身を硬くして処罰を待つ。

王都の兵士だ。直接的でないにしろ、結果的には王に仕えることになる者たちが、主に対しての不満を愚痴っていたのだ。

不敬罪として良くて解雇。悪くて禁固と言ったところか。いや、もしかしたら首切りもあり得るかもしれない。

とにかく昨今の国王陛下はどこか行動が狂気じみてきている。
つい先月もヒスダン遠征に異議を唱えた重鎮を一族もろとも公開処刑に処してしまったらしい。
そんな中での暴言だ。
もはや首が飛ぶのも半ば覚悟していた兵士は、上官のため息を聞いた。
「今のは聞かなかったことにしてやる。死にたくなければ目をつぶれ、耳をふさげ、口を閉じろ――。いいな」
「はっ」
「了解しました。ご忠告感謝いたしますっ」
若い二人の兵士は去っていく小隊長の背中に敬礼しながら礼を述べた。

1―8

それにしても王都は随時ひどいようだ。

（これからイズミは大丈夫なのかな……。本当に王都に行く気なんだろうか）

不安ばかりが次々と浮かんで行く。

「おい、お前」

呼ばれた声に反応し、顔を上げるとそこには見張りの兵士が立っていた。

「はい？」

「仲間の森の民はどこにいる。お前の仲間のせいで俺たちは足止めを食らっているんだ。吐け」

どうやらこの停滞は森の民とやらの仕業らしい。そしてやはりカインはその森の民と間違えられているようだ。

「あのぉ。先ほどから言ってますけど、僕は森の民なんて知りませんよ？　ただの旅人なんですから」

「嘘をつくなっ。この不還の森にコンダクターなしで歩き回れる者などいるものか」

「そんなこと言われても……」

まさか、駆け落ちのために村を捨ててハデムに行く途中です。天馬と一緒に休憩中でした。などと答えるわけにもいくまい。

なによりあの村に自分たちの居場所を知られるのはまずい。

きちんと説明すれば誤解は解けるのだろうが、きっとその先に待つのは最悪のパターンだ。

説明する→身元確認のために村に連絡を入れられる→確認が取れ村の者が迎えにくる→自分とミアは離れ離れ→二度と会えない……。

「そ、そんなのヤダっ！！」

「はっ！？　どうしたいきなり。何が嫌なんだ。大丈夫かお前」

思わず自分の連想ゲームに否定の声を上げてしまう。

見張りの兵士は意外と親身になって心配してくれるが、なんの慰めにもならない。

「う～……。とにかくですね。僕は本当に関係ないんで、放して下さい～。だいたいコンダクターってなんですか」

「コンダクターを知らない？　そんな馬鹿な。森の手前の町で説明を受けただろう？　じゃなきゃどうやってこの森に入ったんだ」

いや、だから。天馬で……。

とは言えるはずもなく、もごもごと口ごもることしかできない。

「そう言えばお前、もう一人の逃げた女と一緒に天馬を連れていたな。どこから天馬を盗んできたんだ」

「なんで盗んだこと前提なんですか……」

半ばうんざりしながらカインは呟いた。

話がそれたのは喜ばしいことだが、逆に核心に迫られたような気がしてならない。しかもレヴォルトの説明などどうやってすれば良いのだ。

更に頭を抱えるハメに陥ったこの状況をどう切り抜けようか頭をフル回転させる。

最も、助け船は意外なところから出されたが。

「おい、見張り交代の時間だぞ」

後ろから若い兵士が顔をのぞかせる。

「お、ああ。もうそんな時間か」

「昼飯もまだなんだろ。ゆっくりと食べてこいよ。どうせしばらくはここで足止めなんだからな」

「ああ、頼む」

そう言うと今までの見張りの兵士はその場を離れていく。

今度はこの兵士に尋問されるのかと、うんざりしながらその顔を見上げた。

「……っ！　イズ……」

「おおっとォ。何かしゃべりたいことがあるのかな？　ちょっと待ってね。メモを取る準備するから」

ウィンクした親友のいつも変わらぬ様子に、カインはやっと安堵の表情を浮かべた。

（良かった――。これで、もう大丈夫だ）

1―9

イズミはカインが大きな怪我をした様子もなく、元気そうであることにひどく安堵した。

もし先ほどの兵士がカインに怪我でもさせるような尋問の仕方をしていたら、ボコボコにしてからこの場を去る計画を立てていたことだろう。

まぁ、兵士をボコボコにするのだから後々逃げづらくなるというリスクを負うことになるのだが……。

とにかく双方にとってカインがかすり傷程度というのは、幸運だったと言えよう。

イズミは他の兵士たちから見えないようにこっそりと縄をほどく。

「合図するまでしばらくは縛られたふりをしといて。でも逃げる準備は万端にね」

できるだけ尋問しているように見えるような体勢で言う。

「それにしても、その格好……」

カインの言いたいことはよくわかる。

今の自分の格好は兵士の甲冑を身にまとい、目立たぬように金髪を茶色に染めている。

「これはその辺歩いてた兵士の方にお借りしただけだから。うん」

「お借りって…」

「本当だから。丁寧に事情を話たら『そうか、なら俺の服を貸してやる』って言ってくれてさぁ。世の中捨てたモンじゃないよね」

実際そんなハズはないのだが、良くも悪くも素直なカインは、まぁそんな兵士もいるのだろう、と信じてしまう。

事実はイズミが話したことと正反対で、見回りに集団から離れていた兵士を叩き伏せ、無理やり服をひっぺがしてきたのだ。

しかし、イズミにとってそんなことは些細なことである。

「髪は？　もとに戻るんだよね」

「あ、コレ？　大丈夫だよ。コルカの実をすりつぶしたヤツだから、水ですぐ落ちるさ」

自分的には一生もとに戻らなくていいけど、とは思うが口に出さない。

イズミたちの村では金髪は珍しくない。だがイズミのように光彩を散らしたようにキラキラと光る金髪はさすがに珍しい。

おそらくカインはイズミの金髪が惜しいのだろう。

苦笑めいた表情を浮かべていると、お供を両脇に連れた騎士が近寄ってくる。

襟元の階級章を見てすぐさまその人物がこの一団の頭なのだと把握する。

「将軍殿」

イズミはいかにも今気付きましたと言わんばかりに跳ね上がり、背筋を伸ばして胸に手を当てるこの国特有の敬礼をする。

「良い、楽にしろ」

敬礼を解く。

相手の意図がわからない限り、こちらは行動に移せない。
おそらく自分が兵士でないことはバレていないと思うが…。

（下っ端兵士の名前と顔を覚えてる分けないよなぁ。将軍だもん）

1―10

偉い人は傲慢だから下っ端まで覚えてるわけがない――と言うのではない。

将軍ともなると自分の隊の人間だけでも二、三千人を超える。

ましてや、直接指揮しなくとも部下、ともなると万を超えるのだ。

そんな人数の名前と顔を覚えきれるわけがない。

問題はこの森の民討伐メンバーは三百程度。その気になれば覚えられる、という点なのだが。

イズミはなるべく目をあわせぬように伏せ目がちにして相手の言葉を待つ。

「なにやら随分と話していたようだな。有力な情報は聞き出せたか？」

「いえ、残念ながらこの者、森の民ではない様子。悪しき血族と呼んでも何の反応もありませんでした」

『――あいつら俺らを見るとすぐに悪しき血族だなんだって言いやがんだ。ムカつくよなー』

先ほど森の中で会った男の言葉を思い出す。

おそらくあの男が森の民と呼ばれる者なのだろう。そして「俺ら」と複数形にしたと言うことは一族であると言うことだ。

確かにあんな化け物じみた身体能力を持った者が一族で存在するとなると驚きだろう。

ましてや王のお膝元のすぐそばにいるとなると不安に思うのも納得できる。

段々、事の流れが見えてきた。

「そうか……。間違いだったとしたらその者の素性は聞き出せたのか？　陛下を狙う不埒者だとしたら見逃してはおけぬからな」

（そ、そうゆう流れになっちゃうんだ。なんてクソ真面目……もとい、融通がきかない将軍なんだ！）

心の底で毒づきながらも、イズミはひきつりそうになる頬を、真面目な表情に取り繕うのに苦心する。

そこで、イズミはハッとして顔を上げた。将軍とバッチリ目が合ったがこの際気にしない。

確かに今、馬のいななきが聞こえたのだ。

イズミは指で輪を作ると、いつものように鳴らす。

「いったい、何を……？」

訝しげに将軍はイズミを見るが、イズミは早々と将軍とそのお供二

人から一定距離置くと、にっこりと微笑んでみせた。

将軍が再びなにやら口を開こうとするが、イズミと将軍の中間に黒馬が降り立つ。
ルティオンだ。

異変を察した兵士たちが寄ってくる前にカインを乗せ、イズミもその背に飛び乗る。

さすがの将軍様も神の使いと名高い天馬の衝撃的な登場に、どう反応してよいのか考えあぐねているようだ。

お供の二人は剣を抜いているが、斬りつけていいものかと、しきりに将軍の方を伺っている。

「ご縁があればまたお会いしましょう」

イズミは馬上から真面目な将軍に挨拶し、それを合図にルティオンはその場から離れた。

1―11

カインをハデムの入り口の手前で降ろすと、主の到着を知ったレヴォルトがトコトコと近寄ってきた。

兵士から奪った甲冑を脱ぎ、カインに処分を頼むと、別れの言葉を述べる。

「それじゃあ、カイン。ハデムに一歩踏み入れた時点で君はアベルだ」

カインは軽く微笑んでから頷き、口元をギュッと結ぶ。

何か一言でもしゃべると涙が出そうになるのだろう。それを必死にこらえているのがわかる。

「永遠の別れってわけじゃないんだ。また君たちが結婚して、子供が三人くらいできたころに訪ねるよ。ね」

幼子をあやすように言う。

「あ、それとミ〜、ミフィリアには君から謝っておいてくれる？」

一瞬、ミアと言いそうになり、あの子はすでに街の中なのだと気付きいて訂正する。

「あの子には逃がす時にキツいこと言っちゃったから……」

「わ、かった。大丈夫」

今のカインにはそれが精一杯なのだろう。震える声で答える。

「ありがとう。それじゃ、元気で！」

そう言うとイズミはルティオンに合図を送り、飛び立つ。

自由な空へと――……。

１－１１（後書き）

とりあえず一幕終了です。読んで下さってる皆さん本当にありがとうございます。わたくし雨木の半分は皆さんの優しさで出来ています。（なんという逆バファ○ン　笑）

この「空の玉座」（設定を詰め込み過ぎたせいで）終わりの見えない長編になるとは思いますが、是非とも末長くお付き合いいただければ幸いです。

そして二幕からですが、続々と新キャラが出てくるかと思われます。街の名前とか人の名前が覚えるのが苦手な方はとりあえず、主人公イズミの名前だけ忘れないで下さい。妹夫婦？　大丈夫、もう出ないかｒ（ｒｙ

ということで。乱文失礼いたしました。

感想、ご指摘いつでもお待ちしております。

第二幕：出逢い２―１

この国の中心部、王都サミラ＝シ・ナの入り口にイズミは降り立った。

「ここが、王都……」

サミラ＝シ・ナを囲う防護壁は左右に延び、その果ては見えない。それだけで王都がどれだけ広いのかがわかるというものだ。

とりあえず天馬たちをどうにかしなくてはならない。希少種の天馬を連れていては目立ち過ぎる。――が、良い案などすぐさま浮かぶはずもなく。

仕方なく、イズミは二頭を連れて堂々と入り込むことにした。

「次の者、前へ」

検閲の門番がイズミを呼ぶ。ルティオンとレヴォルトについてくるように言い聞かせ、前へと進む。

周りでは「天馬が二頭も」だの「何者なんだ」だのと囁かれ、イズミは注目の的だ。

「名前は」

その間にも確認は始まる。

「イズミです」

臆することなく答えるよう努める。

「どこから来た」

「ハダムから」

嘘ではない。確かにハダムの方から来たのだから。

どこかの詐欺のような手口ではあるが、間違いではないため良心の呵責はさほど無い。

門番はパラパラと手元の資料と見比べ、前科者でないか、逃亡犯ではないかと確認していく。

しかしまぁ、いくら確認したとしても村からの追っ手はまだかかるまい。今頃は三人がいなくなったと、村中を探し終えた頃だろうから。

「その天馬たちは？　見たところなついているようではあるが」

やはりきた。予測していた質問だ。あらかじめ答えは用意している。

「二頭が子供の頃に群れからはぐれていた所を見つけました。それ以来私が育てています」

それは嘘ではなく、本当の話だった。少し都合よく端折ってはいるが、嘘をついているわけではないので、咎められる謂われはない。

「ならば許可証もあるな」

当然の流れだ。

どこの国でも貴重種を飼うのには特別な許可がいる。これは密猟などを防ぐためだが、この許可証、今のイズミにはすこぶる都合が悪い。

許可証には本人の名前以外にも住居地、身分、貴重種の名が書かれている。

イズミの名前も、増してやルティオンたちの名も知られて困ることはない。一番の問題は住居地と身分だった。

そこには誤魔化しようもなく、ありありとあの小さな村の名前と、領主の跡継ぎであるということが書かれている。

（ここが勝負所だ――！）

イズミは緊張を顔に出さず、できるだけ自然を装って許可証を差し出す。

「ヒュ、ヒュン……？　なんて発音するんだ、この村の名前は」

村の名前はこの国の言葉ではないため、慣れぬ者には発音が難しい。

2―2

正しい発音を教えるが、やはり門番は発音できない。？

イズミの住んでいた村は王都に生まれ、王都で死にゆく者であれば一生聞くはずもない辺鄙な村だ。

追っ手がかかってなければイズミの村に反応しないだろう。そしてやはり門番は村の名前自体にしか反応しなかった。

とりあえず第一関門は突破したと言うところか。

「先ほどはハデムから来たといっていたが、住居地が違うのはどうしてかね？」

「つい最近結婚が決まりまして、それで村を移ったのですが。なにぶん急なことでしたから……。まだ役所に届け出るまでの余裕はなかったんです」

嘘八百。だが、門番の様子からこの程度の理由を並べておけばしつこく追求されることもないだろうと踏む。

良心の呵責？

しかし、厳密に言えば嘘じゃない。結婚が決まって村を移るのは本当だ。ただそれがイズミ自身の話でなく、妹と幼馴染みの話であるだけ。

「そうか、ならいい。早めに届け出を出すように。次の者、前へ！」

身分には触れられない。聞いたこともないような村の跡継ぎだからと言って、特に警戒すべきでもないと判断したのだろう。

無事に門をくぐると、そこは国で一番栄えている都、サミラ＝シ・ナだった。

イズミの住んでいた街からは想像できないほどの人だ。
式典でもないのにメインストリートは人で埋め尽くされ、道の脇には露店が立ち並ぶ。

それだけの人口からして、イズミのように貴重種を連れた者もさほど珍しくなく、様々な種族の人間や動物がひしめき合っていた。

二頭の天馬を連れているからと言って、そこまで目立つこともなさそうだ。
安堵のため息をつきつつ、イズミは厩のある宿を探す。

「それにしても、賑わってるなぁ」
「坊や、王都は初めてかい？」

にゅっと横から風船を差し出され、突然のことについ受け取ってしまう。
風船を差し出したのは道化師の格好をした客引きらしい。

「崇人の儀は済ませたので坊やじゃないんですけど……」

ちょっとムッとしながら訂正するも、道化師は気にした風もなく戯

けて驚いてみせた。

「おや、そりゃすまなんだ。でも成人の儀にはあと二年足りない。私からしたらまだまだ坊やだねぇ」

そう言って呵々と笑う。

「坊やはこの街は初めてのようだねぇ。何かお探しかい？」

「宿を。できれば長期滞在できて、それなりの厩がある宿を探してるんですが」

見ず知らずの人間相手に不用心かなとも思うが、特に危険もなさそうなので素直に相談してみる。

「ふ～む。天馬二頭も一緒にとなるとそれなりに料金がかさむねぇ。それでもいいって言うんならいくつか心当たりはあるねぇ」

幸い、路銀ならばそれなりにある。

それに、換金所に行けば多少薄汚れてはいるが、外套がかなりの額になるだろう。絹で織られた布に、銀の釦（ボタン）。意匠を凝らした刺繍がさり気なくあしらわれた高級品だ。狭い村でも領主の息子。服もそれなりのものを持っている。

2―3

「法外な値段でなければ大丈夫。いくつか教えて貰えますか？」

頼むと、道化師は快く三つほど手頃な宿を教えてくれた。

礼を言ってから、風船を持ったまま裏路地へと続く脇道を横目に、言われた道を進む。

裏路地は暗く影を落とし、華やかな表通りとは一線を画していた。

「……」

国の中心部から入った亀裂を目の当たりにし、眉をひそめる。

立ち止まったイズミの背を、大人しく付き従っていたルティオンが鼻で押す。それに倣い、レヴォルトも隣に立ち、安心させるように尻尾で手をなでた。

「ありがとう、レヴィ、ルティ。俺は大丈夫」

二頭に励まされ、イズミは微笑んだ。

またしばらく明るい道を進んでいく。

「たしか、花屋を右に曲がって、美容院の二軒挟んだところに……ああ、ここか」

見上げた宿屋は確かに立派で、それなりの格式高さを伺わせた。

ルティオンとレヴォルトには通りで待つように言って、一人扉に手をかける。

二百年ほど前に、貴族の間で流行っていたというデザインを模したアンティーク風な造りの扉を開く。

入り口では数人の使用人が頭を下げ、客を迎える。

「いらっしゃいませ。ようこそシュノーホテルへ」

従業員が挨拶をし、顔を上げる――と同時に怪訝な表情を浮かべた。

そしてジロジロと不躾にイズミを舐め回すように観察する。

言いたいことはわかる。

どうせ「金も持ってなさそうな薄汚いガキがなんの用なんだ」だろう。

本当だったらここまで汚れることもなかったのだが、森の中でのあの男との戦闘ですっかり泥まみれになってしまったのだ。

（恨むぞ、あんにゃろ……）

表面上は表情を変えずに要件のみを伝える。

「とりあえず、数週間ほど滞在したいのですが……。部屋は空いてますか？」

空いているに決まっている。

いくら賑わっているとは言え、全てが全てこの街の外からきた人間ということもないだろうし、特別な式典や祭が近いわけでもないからだ。

「はぁ、数週間ですか。少々お待ちください。ただ今担当の者に確認して参ります」

担当はお前じゃないんかいっ！！――というツッコミは控えておく。
今はとにかく心証を良くして宿を取ることを優先させたい。
おそらく、責任者に泊めて良いかどうかを相談しに行ったのだろう。

（明らかに怪しいもんなぁ、俺）

そうしている間にも、身なりの良い他の客はどんどんと部屋に案内されて行く。

2―4

予想はしていたことだが、ここまで対応の差をまざまざと見せ付けられると厳しいものがある。
仕方ないと自分を慰めつつ、先ほどの従業員をひたすら立ちんぼで待ち続けた。

ソファに座って待つという手もあったが、今の状態で座っては確実にソファまで汚れてしまう。それで弁償しろなどと言われた日にはたまったもんじゃない。

それにしても……。

「長い……」

かれこれもう十五分は待っている。それでも一向に従業員が現れる気配はない。

もしや、責任者に掛け合ってくれているとか……！？
そうだったらいいな、などと考えつつ、またひたすら待ち続ける。

しかし時間は無為に過ぎて行く。

三十分、四十分……五十分……。

とうとう一時間が経った頃、あの従業員の男が現れた。

「……！」

イズミが待ちこがれていた人物の出現に顔を輝かすと、反対に従業員は眉をひそめた。

それでも近寄ってくる素振りを見せないので、イズミの方から歩み寄ると、男は露骨に顔を歪めて見せた。まるで汚いものを見たとでも言わんばかりに……。

「なんだ、まだ居たのか。営業の邪魔になるからとっとと出ていけ」

その瞬間、イズミの表情は固まった。

「いいな、早く出ていけよ。シッシッ」

犬の子を散らすようなぞんざいな扱いで、従業員はその場から離れて行こうとする。

それをイズミは相手の服の裾をつかみ、止まらせた。

触られた相手は不快そうにイズミを見るが、目が合った瞬間、何も言えなくなる。

イズミの冷え冷えと凍てついた真っ青な目に射竦められてしまったのだ。

「……ッ！」

声も出ない様子の相手の目を数秒間見つめ続ける。

そして突然興味を失ったように裾を手放すとそのままきびすを返し

た。

宿屋から出てきたイズミに、二頭は待ちくたびれたようにすぐさま駆け寄ってくる。

イズミの様子が違うのに気づいたのか、二頭はしきりにイズミの手や顔を舐めてきた。

その優しさに甘え、すぐ横にいるレヴォルトの顔に頬をすり寄せた。

するとルティオンがそれに妬いたのか、レヴォルトを押しのけて我も我もとイズミに顔を盛んにすり寄せる。

「わわっ」

あまりに強くすり寄ってくるものだから、イズミは仰け反って倒れそうになる。それを後ろから支えてくれたのが、レヴォルトだ。

レヴォルトはルティオンを「仕方のない子ね」と見やり、振り向いて苦笑しているイズミの頬を優しくひと舐めした。

2―5

二頭のおかげで元気の戻ったイズミは気持ちを切り替え、教えられた二軒目の宿屋へと意気揚々と向かう。

「それにしても都会はヒドいとこだって昔ばあやが言ってたけど、本当なんだね」

二頭に話しかけつつため息をついた。いくら小さい村とは言え、仮にも領主の息子だったのだ。下にも置かれぬ扱いを嫌々ながらも当然のように受けていた身にとって、見ず知らずの人ばかりが集う都会はなかなかに厳しいものがある。

「あ、でも最初に会った道化師は別かな。親切にしてくれたし」

飛んでいかないように腕に巻いた風船を見上げて微笑む。

「坊や扱いには困ったけど……。にしてもそんなに俺ってガキに見える？」

ルティオンは「そんなことないわよ！」と勇気づけるように鼻を鳴らす。

「おおっ！　俺ちゃんと崇人らしく相応の年に見えるよねっ」

大きく首を振って同意を示すルティオン。

「うわーいっ！！　ルティ～。愛してる～」

そのルティオンの首に抱きつくイズミ。ルティオンもイズミに抱きつかれ、いたくご機嫌のようだ。

はたから見たらかなりドン引きな構図なのだが、幸か不幸か、一人と一頭は辺りをはばからず自分たちの世界に入り込んでいる。

そしてその様子をレヴォルトだけが冷静に眺めていた。

人の言葉を話せたらため息混じりにこう言うことだろう。「その振る舞いがすでに大人と認められないのよねぇ」と……。

またしばらく道なりに歩いていったところに、これまた大きな宿屋があった。

「ここが二軒目だ。レヴィ、ルティ。またちょっと待っててね。今度はすぐもどって来るから」

今度こそは、と意気込んで華美に感じる扉を開けると、そこは……。

「いらっしゃーい。あら坊やお泊まりかしらん？　何泊するぅ？お姉さん坊やみたいな子すっごく好みなのー。お泊まりの間、一生懸命ご奉仕させてねぇん」

肌も露わにスケスケ、ギリギリ、な服を着た魅惑的な女性たちが待ちかまえていた。

その中でも特にグラマラスな女性が、イズミのあごに手を添えてなで上げる。

その扇情的な表情とあいまって、背中にゾクリと甘やかな電流が流

れる。

その快楽に必死にあがらうイズミには女性の坊や扱いに訂正を入れることができないでいた。

「あ、あのっ、ここって。もしかして、し、私娼宿だったり、します……？」

「んふ。違うわよぉ」

2―6

「あ、違うんだ。良かった……」

それにしてはこの宿のいかがわしさの説明がつかないのだが。

「ええ。私娼じゃなくて、公娼宿よぉ」

語尾に思いっきりハートマークが付きそうは甘ったるいしゃべり方で訂正される。

（たいして違いないいいいっ！！）

心の中で盛大に叫ぶが、現実では硬直する。眼前の娼婦は硬直してしまった姿を不思議そうに眺めた。

「ま……」

絞り出すようにイズミはつぶやく。

「ま……？」

女性にくるりと背を向け、叫ぶ準備は万端。イズミは思いきり息を吸い込み――……。

「間違えましたぁっ！！」

逃げ出した。

「ハッ、ハッ……。なんか、えらい目にあった」
呼吸を整えながら、額の汗を拭った。
「悪気はなかったんだろうけど、坊や扱いしといて娼館を紹介しないで欲しいよ……」
にんまり笑顔の道化師を思い出して、深々とため息をつく。
別に不能だとか、女性に興味がないわけではないのだ。若い青年らしく、女性に興味はあるし、それなりの経験だって積んでいる。しかし、真っ昼間からあんな刺激的な誘われ方をすれば逃げ出したくもなると言うものだ。
第一、娼館に泊まれば普通の宿より高くつくのは請け合い。今は無駄金をびた一文出すわけにはいかない。
据え膳食わずは……というが、お金のためだ。男の恥ぐらいいくらでもかいてやろうじゃないか。第一、恥はかき捨てなんて便利な格言も先人は遺しているだろう。
そういう風に誰にともなく心の中で言い訳を並べた後、娼館から逃げ出したイズミは最後の頼みの綱である宿屋の前に来ていた。
これまでの二軒と違い、店構えの贅沢は控えめだった。かと言って質素だとかみずぼらしいわけでもない。
主張しない美があちこちに散りばめられており、大人な落ち着いた雰囲気を醸し出していた。

「ここなら期待できそう」

三度目の正直、とばかりに扉を力強く開け放つ。

「すみませーん？」

「ようこそ、ラム酒と子羊亭へ！」

出迎えるように入り口に立っていたのは、満面の笑みを浮かべた中年男だった。

「……ど、どうも」

気の良いオヤジといった感じの中年だ。出っ張った腹はビールっ腹だろうか……。

「私はこの宿屋の主人のラズです」

「イズミ、です」

主人に圧倒され、目を白黒させながらも勢いに乗せられて名前を告げてしまう。

「ささ、そんなとこに立ってないで、もっと中へお入りください。外のお馬さんたちは裏の厩に繋いでおけばいいですか？」

「あ、天馬たちは厩でいいんですけど、繋がなくて大丈夫です。絶対に俺から離れませんから」

――と言うか。

（この宿屋に宿泊決定なのかな。それ前提で話が進んでるよ……ね

（え？）

2―7

迷惑な話ではない。むしろありがたい話ではあるが。
どうにもとんとん拍子で事が進むと、それはそれで不安になるものだ。後になってぼったくりな宿でしたー。ではシャレにならない。

（俺が天の邪鬼なだけなのか……）

イズミの心中を知ってか知らずか、ラズは話を進めていく。

「ミッチェール！　お客様のお馬さんたちを厩に連れて行ってくれるかーい？」

使用人がいるのだろう部屋に向かってラズが叫ぶと、中からミッチェルと呼ばれた女性が出てくる。

いや、女性と言うより……。

「幼女？」

「だりぇがよーじょでしゅかっ！　ミチェは立派な女性なのりぇしゅ」

「そんなこと言っても、ねぇ」

説得力ないし、とは言わずとも分かるだろう。
舌っ足らずな喋りで、イズミの腰辺りから睨み付けてくる。その姿はどう頑張って表現しても少女が限界だ。
更に言うなら、イズミが言ったように幼女が一番しっくりくる。

「むきー！　失礼なやつなのれすっ！！　？パパ、この男こてんぱんにやっつけて良いでしゅかっ？」

「ぱっ……！」

パパぁ！？

「こらえてこらえて。ミッチェル、君は立派なレディだろう？　ほらお客様のお馬さんたちを厩へ連れてお行き」

幼……少女ミッチェルはツインテールを揺らしながら、外で待つ天馬たちのもとへ駆けて行く。その背をラズは目を細めて見ている。どう見てもパパという面ではない。

「ねぇ、イズミさん。うちの娘可愛いでしょー？　ああやっていつも『パパのお手伝いしゅるー』って言うんですよー！　んもー可愛いくって可愛いくって」

（うわっ。親バカ節炸裂）

「将来が楽しみでならんのですよ。うちの奥さんの子ですからね、美人になるのは確かですよー」

（あぁー。このままだと、娘自慢だけでなく、奥さん自慢まで始まりそうな雰囲気）

わりと避けたい感じだったりする。

「はい、そーですねー。それで宿泊に関してなんですが、いいです

か？」

こうなっては無理やり話題転換させるしかない、と値段など宿の諸々の話に入る。

「ああ。こりゃすみませんね、つい。えーと、料金は前払いです。何泊のご予定ですか？」

「詳しくは決まってないんですが、仕事と下宿が見つかるまでって考えているんで……一、二週間くらいは」

一、二週間で王都で仕事が見つかると良いのだが……。

一抹の不安が拭えぬまま伝える。

「ならとりあえず七日分だけ支払い、お願いします。それ以上滞在のようでしたらまた言って下さいね」

2―8

ラズはそう言いながら七泊分の金額が書かれた伝票をイズミに差し出す。決して安い値段ではない。

（ん、でもまぁ妥当かな）

イズミは腰につけていた皮財布から銀貨を数枚取り出して渡す。

「はい、確かに。部屋は三階の突き当たりでお願いします。ちなみに食事は八時、十二時、十九時頃にそこの――」

指差したのはすぐ脇の、階段とは反対側にある扉だ。

「食堂で取ることになってます。あ、でも時間外でも言っていただければ簡単なのは出せますから、食いっぱぐれても安心して下さい」

「雨浴機は？」

「部屋にありますよ。湯船付きです。それと、大浴場も地下にありますから気が向いたらどうぞ」

本当になかなか良い宿だ。店の名前と主人親子はちょっとアレだが……。

「分かりました。これからとりあえず一週間、お世話になります」

ペコリと頭を下げると、イズミは使用人に案内されて部屋へ向かう。

部屋もまた十分に満足できるものだった。
贅沢になりすぎない品の良い調度品の数々。一人が泊まるのに申し分ない広さ。

イズミは少ない荷物を置くと、金だけもって宿を出た。
もちろんラズには一言断ってだ。

五時を過ぎても通りは賑わっていた。

今までの時間でイズミは、メインストリートの露店や聖堂、寺院など王都サミラ＝シ・ナの有名どころを見て回った。

治安が悪いことで有名な郊外（スラム）周街や、どこか闇を抱えた裏路地などは見に行ってなかった。
この街の暗部はもう少しこの街に慣れてからでいい。

そして今、イズミは王が住まう場所。カダリア城を訪れていた。

正面の王族や上級貴族が出入りする門扉は固く閉ざされ、歩兵が三人ばかりつめていた。

イズミは正面から人の波にのって南門へと移動する。そこの門は出入りが頻繁で、城内も一部だが一般公開されている。

入り口で名前を記入する程度の簡単な手続きを済ませ、城内へと足を踏み入れる。

「うわぁ……」

入ってすぐ開けたホールに繋がっていた。
吹き抜けの天井には、最近人気の王宮お抱え絵師が描いたと思われる風景画が覆い被さるように広がっている。

脇の壁は等間隔に柱が埋め込まれており、その彫刻は非常に繊細であった。

（正面でもないのに、この豪華さ。やっぱり一国の主が住まうところとなると違うなぁ）

2－8（後書き）

※雨水機＝シャワー

2―9

見ると周囲の観光目的の者たちも、イズミと考えることは一緒なのかしきりに感心している。

ホールから階段を上り、順路通りに城内を見て回る。しかし、やはりいまいちしっかり見ることは叶わず、貴重な調度品のある部屋などは、触れられぬようにロープが張ってあった。

また執務室などのある方への通路も封鎖されており、不審な輩が入り込まないように見張りすら立てられているのだ。

できれば内部に入りたい。目的のために、今はできるだけ城の内部の構造が知りたかった。

安全対策からか、城の構造が書かれた地図は出まわっていないことはラズに確認済みだ。

（まずは城内で仕事が見つかれば最高なんだけど……）

しかもできるならば目立たず、城内のあちこちを出入りできる、下働きのような身分であればなお良い。

順路通りに一周回っただけではほとんど把握することができなかった。

仕方なく外へ出て、兵士や城勤めの憩いの場となっている広場へと足を運ぶ。

広場に集まり剣の鍛錬を行う兵士の甲冑を見て、森で出会った将軍を思い浮かべる。

あの騎士は良かった。騎士らしい騎士だと直感的に感じた。

（そう言えば、証がなかったな）

将軍であるからして王に忠誠を誓っていないはずがない。なのに彼の胸には忠誠の証として主から下賜される、主の家名入りの飾りがなかった。

「……欲しいなぁ」

イズミは胸元のペンダントを服の上から握り締める。

（目的のために、同志が欲しい）

感傷を振り払うように息を吐き出す。そして不意に顔をあげれば、そこに見覚えのある姿があった。

「あの子は、ミッチェル？」

先ほど宿屋で見た少女の姿だった。

宿屋の主人であるラズの娘が王城の、しかも兵士や城の者が多く集まる所に何の用だろうか。

見ればミッチェルは甲冑を身にまとった女性と話し込んでいる。視線に気づいたのか、女が訝しげにイズミと視線を交錯させた。

しばらく見合っていると、ミッチェルが女の視線の先に気づいた。

ミッチェルは女に話しかけると、女は心得たように頷き、イズミを手振りで呼び寄せる。

一体何の用なのか。

招かれるままに近寄って見ると、女の甲冑は一般兵のそれとは異なり、軽さに重きを置いた純白の甲冑だったことが分かる。

（戦乙女の甲冑……！）

左胸に浮き彫りにされたレリーフは純潔を好むというユニコーンが描かれている。

それこそが、王国最強とも名高い女性ばかりの戦闘集団、戦乙女の証だった。

２―９（後書き）

ユニーク１０００、ＰＶ３００００超えありがとうございます！
感謝のしるしに本日はもう１ページ追加させていただきました。

だいぶ初期段階からお気に入り登録をしてくださってる方、つい最近お気に入りにいれて下さった方、感想や評価をして下さった方々。
本当にありがとうございます。
雨木は皆様の優しさで出来てる逆バ〇ァリンっ子でございます↑

何はともあれ、これからも宜しくお願いします。

2―10

二人の前に立つと、前置きもなくミッチェルが言う。

「本当はあなたみたいなしちゅれいな男に頼むのは不本意でしゅが、この際あなたで妥協しましゅ。手伝いなしゃい！」

ビシリとイズミを指差してミッチェルは命令する。

話が見えない。

「はぁ……。俺にいったい何をさせようと？」

「こちらのお姉様は本来ならあなたごときじゃ、お話しゅるどころか、お目にかかることも叶わない高嶺の花！　慎んでお力になりなしゃいっ」

素晴らしい口上だが……。

「だから、何を手伝わせようと？」

首を傾げて話を拝聴するイズミと、居丈高に命令するミッチェルにを見て、戦乙女は豪奢な金髪をかき上げながらため息をついた。

その悩ましげな表情についフラフラとなびいてしまう男はさぞや多かろう。

「ミチェ、それはレディの振る舞いとしてはよくありませんわ。人にものを頼む身としてそれではあまりにも失礼というもの」

「――はうぅ！」

叱られるというよりたしなめられたミッチェルは花が萎れるように落ち込む。
さすがのおてんば娘も、この高貴な女性の前では形無しのようだ。
「失礼いたしました、ユア　ハイネス。わたくしどもの無礼をお許し下さいませ」
スカートのようになびく腰のひれをつっと摘み、宮廷の貴婦人の挨拶をする。
「お気になさらず、清き乙女。あなたのそよ風のように優しい微笑みに、傷ついた心も癒されました」
歯の浮くようなセリフを平然と並び立てられる程度にはイズミも慣れている。
腐っても領主の跡取り息子である。宮廷マナーから言葉遣いまで一通りのことはできるのだ。
しかし乙女もキザな言葉は言われ慣れているのか、頬を赤らめることなくやんわりと返す。
「お世辞でも嬉しいお言葉ですわ、ユア　ハイネス」
イズミのやや汚れた姿を見ても、最高敬称を用いてくるあたり、皮肉なのか真面目なのか判断に困るところだ。
「私の口は真実しか語りませんよ美しいお方。それより、何かお困りのようですね。何か私に力になれることはありますか？」

優しく微笑んで聞いた。

普通、男性から貴族の女性に名前を聞くのは無礼にあたる。そして眼前の美女は金髪に青い目と、明らかに高貴な出自を示す外見をしている。そのため、まどろっこしくとも、いちいち呼び名を考えなくてはならない。

「まぁ、お優しい方。それでは、お力添えをいただけますかしら」

「もちろんです、聖獣の乙女。微力ながら不肖イズミ、精一杯あなたのために尽くしましょう」

2―11

ミッチェルの頭上で話は飛び交い、とんとん拍子に事が進む。

「お前、なんなんでしゅかっ。この態度の違いは！」

足元に膨れっ面で睨みつけてくるおチビさんがいるが、あえて気にしない。いちいち反応していてはミッチェルみたいな性格相手ではキリがないだろうから。

「それで、どのように力をお貸しすればいいですか？」

案の定ミッチェルはエサを詰め込んだリスのように頬を膨らませる。乙女はそんなミッチェルの頭を軽くなでて「実は……」と切り出した。

「城内の一室に飼われている動物専用のお産室があるのはご存知ですか？」

まあ、それくらいあって当然だろう。イズミは首を振る。

「今、城内で保護しているベンガルのメスの一頭がお産を控えているのですけれども……」

ベンガルと聞き、イズミは目を剥く。

ベンガルと言えば、貴重種の妖魔である。虎のような体躯でありながら、砂漠に住み、砂の下を潜って生きる妖魔だ。

扱いも慣らせるのも非常に難しく、その凶暴性から危険度上位指定妖魔としても認定を受けているほどなのである。

（そんな妖魔を城で飼っているとは）

「そのベンガル、部屋が気に入らないのか、しきりに興奮してまして……。わたくし共も上位指定妖魔のお産など初めてで、皆目検討もつきませんの。このままでは母子共に衰弱死してしまいますわ」

乙女は申し訳なさそうに眉尻を下げる。

「仕方ありませんからこれからお産まで、そのベンガルに薬を投与し続けてしまおうという話になりましたの」

「それはまた……」

なんとも乱暴な話だ、とは続けずに言葉尻を濁して曖昧な笑みで誤魔化す。

その表情からだいたい言いたいことは分かったのか、乙女も同じような苦笑を浮かべるに留めた。

「それで問題なのはどうやって薬を投与するか、ということでして。薬で眠らせようにもベンガルの血には体内に取り込んだ毒を中和させる作用があり……」

常以上に凶暴な上、身重でも敏捷さを欠かないベンガルに打つ手はないのか。

「マタタビを与えては？　ベンガルもネコ科だから効くと思います

けれど」
なかなかに妙案では、と提案するが乙女の表情は芳しくない。
「もしかして、実行済みだったりしますか？」
コクリと頷く乙女。
「確かに効きましたわ。ですが、一時的なもので……。十五分程度しか保ちませんでしたの」
「本当に打つ手無しってことですか」
事は思いのほか八方塞がりらしい。イズミはげんなりと沈む。
「そこを何とかしなしゃいって言ってるんでしゅ！」
「そんなこと言われてもねぇ。俺に何ができるってのさ。手伝える範囲でなら力を貸すのにやぶさかではないけどね」
茶色に染めた髪をガシガシとかきあげて肩をすくめる。指に茶色の塗料が着いたのを見て、後で染め直さなくては、と思う。王都では貴族でもないイズミの金髪はあまりにも目立ち過ぎる。
幸い染め粉になるコルカの実は森でいくつか確保してきた。
（そういえばコルカって……）
「お前にはできることがあるはずでしゅっ。ミチェの天啓はハズれません！」

「天啓？」

思考に入ろうとした瞬間、ミッチェルの気になる言葉に関心が移る。

「ミッチェルには王家の血が混じっています。外見こそ全く表れてませんが、血筋的にはわたくしの遠い親戚ですわ。そのため、この国の王家に連なる者にだけ顕れる力がミッチェルにも宿っています」

乙女の説明の最中、ミッチェルはしきりに胸をそらして、えばりモードに入る。

憎たらしい笑みを浮かべたミッチェルはどうだ参ったか、とばかりに得意満面だ。

「天啓は王家の血の中ではわりと多く顕れる能力のようですわ」

珍しくない、という乙女の他意無い説明にミッチェルはすっかりしょげ返る。

2―12

コロコロとよく表情の変わる面白い子、というのがミッチェルに対する印象であった。

「その天啓で今朝方、助けがあると出たらしく。それで先ほどになってそろそろここを通りかかると言われましたの」

「それが私ですか……。一体どのように天啓が下ったのでしょうか」

その質問に答えたのは天啓を受けた本人、ミッチェルだった。

「ミチェの天啓には『今日来る旅人、訳ありな人。乙女の悩みを解くお人』って出たんでし。今日来た旅人はお前しかいないからきっとお前のことなんでしゅっ」

「なんだか、天啓ってもっと神秘的でありがた～いものかと思ってたけど」

今の話を聞く限り、出来の悪い童謡のような気がしてしまう。

「その天啓の信憑性は？」

一番気になるところである。手伝っても結局役立たずで終わりました、では目も当てられない。

「この子の天啓はかなり抽象的ですが、読み解きを間違えなければ百パーセント当たりますわ」

「へぇ……。それはかなりすごいなぁ。もしかして、ミッチェルは王家の血が濃いのかな？」

それは答えを期待しない呟きであったが、答えは意外なところから返ってきた。

「いいや、ミッチェルは先祖返りなんさぁ」

振り向くと、そこにはそばかすを顔に散らした長身の青年が立っていた。

赤茶けた短髪に黒眼、ひょろりと長い手足と、特別これといった特徴はないが、どこかで見た覚えのある青年だ。

「ハン兄さま！」

兄と呼ぶからには兄妹なのだろう。そう言われればラズに目元が似ている気もする。

（ん～？？でもどっかで見た気がするんだよなぁ）

「やぁ、ミッチェル」

青年はミッチェルに微笑みかけると、次に乙女の前に跪いてそのたおやかな手を取る。

「ボクの女神。夕日に照らされる君はまた一段と美しい。どうだろう女神、この良き日にボクと結婚しないかい？」

そのまま青年は乙女の手の甲にキスを落とす。

この瞬間、イズミは乙女がこっぱずかしいセリフを言われても、微動だにしない理由が分かった気がした。

「ありがとう、ハンコック様。でも、わたくしよりあなたに相応しい方はたくさんいらっしゃいますわ」

体の良いお断りの返事。

「そんなことはないさぁね、我が女神。明日にはお心も変わっているかもしれないし……まぁ気長に待つさ」

振られても気にした様子なく、諦めませんと告げるハンコック。この調子だと、青年は乙女に会うたびプロポーズを申し込んでいるのだろう。

2―13

ミッチェルもそんな二人のやり取りは見慣れているらしく、特段気にするそぶりも見せずに話の続きを促した。

「お姉様、ハン兄さまは気にしなくていいでしゅから。しょれより先に、この旅人をベンガルのところまで連れて行った方がいいんじゃないでしゅか？」

兄のスルーを提案するミッチェル。

「おおっ！？　さり気にヒドいさね、ミチェ」

「そうね。それじゃあミチェ、今日はこの辺でお兄様とお帰りなさい。叔母様もきっと心配していらっしゃるわ」

ハンコックの反論を意に介すことなく、その申し出を受諾する乙女。そして柔らかに言っていることは「バカ兄貴を連れて帰れ」である。

（タッグを組んだ女って怖いなぁー……）

ついイズミは遠い目で傍観を決め込んでしまう。

プロポーズは日課となっていただけなのか、ハンコックはあっさりと引き下がる。

苦笑混じりにイズミに頭を下げ、ミッチェルの手を繋いだ。

おそらく、イズミが宿に帰ったらまた会うことになるだろう。

どこで会ったのか分からない。モヤモヤとした気持ち悪さを残し、

ハンコックとミッチェルは城内から出て行った。

その背中を見送ると、乙女は途切れていた話の続きを始める。

「ミッチェルのことはまた本人に聞いて下さいませ。とりあえず今はベンガルのお産室までご案内いたしますわ。わたくしに付いてきて下さいませ」

そう言うと、一般人立ち入り禁止の扉から、門番に一礼するのみで城内に入り込んでしまう。

それだけ乙女の地位が確立されている証拠だろう。

門番たちは乙女に見とれながらも敬礼をし、その後に続くイズミの顔を不審なものを見る目で見てきた。

中に入れば、そこは別世界だった。

街の喧騒とも、郊外周街（スラム）のいかがわしさとも……、中庭の明るさでさえ関係のないものとなってしまう。

繊細な造りの窓から差し込む夕陽が優しく辺りを包み込む。

まるで今だけ時を止めてしまったかのような静謐な雰囲気の中、乙女とイズミの衣擦れの音と足音のみが反響する。

時折、下働きか哨戒（しょうかい）の兵士とすれ違う以外に人とは会わず、その者たちですら乙女が通るとモノも言わずに脇に避け、頭を下げるだけだった。

「この部屋です」

やがて一際豪奢な部屋の前に着くと、乙女はようやく振り返りイズミに小声で話しかけた。

2―14

「この扉……」

よく見るとその部屋の扉は一見しただけでは分からないが、よく見ると、熱には弱いが衝撃に強く、防音性に優れているという特徴のある特殊金属で造られたものであった。

壁も同様で、金属の上にそれとは分からぬように壁紙を貼っている。

「わかりますか？」

「え、あぁ。はい。火炎弾か火鳥でも用意しない限り壊れない部屋ですね。……しかしまた、なぜ？」

「ここまで念入りにしているか、と？」

乙女は続く質問を先に言って、それに答える。

「もともとこの部屋は、保護された貴重種や、間違えて人里に降りてきた危険種を隔離するためにある部屋でした」

「あ、だから人が殆ど出入りしないんですね」

先ほど人とすれ違わなかったのにはそういった理由があったのだと知る。

「ええ。それに今はお産を控えて気が立っているベンガルがいますから。用事がない限りこちらの西棟の端には近づかないように言っておりますの。万が一、ということもございますでしょう？」

含みを持たせた笑みを浮かべる。

「はは……。ですが、こうなると私にできることがあるとは思えないのですが」

普通の人が近づかないような危険なもの相手に、天啓で指名されたからと言ってイズミができることがあるとは思えないのだ。

イズミの腰が引け気味なのを察してか、乙女は無理強いすることをせずに納得させるよう説明する。

「できるならベンガルを落ち着かせて、自然分娩を迎えられるのが一番ですが……。なんとかベンガルを診るだけでもできませんか？　もちろんイズミ様の身の安全はわたくしが保証いたします」

「あなたが……？」

「はい。わたくしでは心もとないとおっしゃるのでしたら、城内にいる兵士を集めて守らせますわ」

そこまで言われて拒否しては男がすたる……という理由だけではないが、確実と言われた天啓に指名されたのだ。やるだけはやってみよう。

多少の不安を残したまま、できうる限りのことをすると約束する。

「でも、私は医学も妖魔取り扱いの心得はありませんから。　私の行為が招いた結果には一切の責任を負いません。それでよろしければやってみましょう」

確約だけはしっかり取り付けておく。これで後になって万が一責任問題に発展しても、処罰を受けることはないだろう。

「お願いします」

乙女は深々と頭を下げる。

「まだお礼は早いですよ」

それを制し、乙女の手から扉の鍵を受け取る。

怯むことなく鍵を差し込み回すと、錠の落ちる小気味よい音がする。

「わたくしが先に……」

言うなり乙女はイズミの前に立ち、わずかに押し開いた扉の隙間にするりと何かを投げ込む。

2―15

そしてすぐさま、再び扉を閉めてしまう。施錠はしないものの、ぴったりと隙間なく閉めてしまった後では、部屋の中では何が起きているのか分からない。

一分ほど経った頃、意を見計らって扉を開く。
念のため右手は腰元の剣の柄に掛けたままだ。

「なにを――」

したのか、と問う必要はなかった。

部屋の中ではすっかりリラックスした様子のベンガルが、侵入者たちを見向きもせずに横たわっていたからだ。

「あれは、マタタビ？」

「ええ。効力は十五分程しかありませんが」

剣の柄から手を離し、ベンガルの方へと促す。近づくと、ベンガルはピクリと耳を振るわせてイズミの目をじっと見つめる。

それはまるで、敵か否かを見ているのではなく興味をひくものを見つけた、といった風であった。

乙女はその後ろでイズミを静かに見守っている。

一歩踏み出すごとにベンガルはピクピクと耳を振るわせるが、逃げる素振りは見せず、それどころかイズミの真意を確かめるように視線を外さない。

ベンガルの理性に満ちた赤眼の中へと導かれるような心地を味わう。

静かに目を閉じた。

同化していく感覚。なんとも言い難い浮遊感に身を任せ、ベンガルの内をたゆたう。

しばらくすると一つのはっきりとした赤の光と、弱々しく明滅する透明な光のイメージが浮かんだ。

そのうちの赤の光に手を伸ばす。触れるか触れないかのところで、映像がイズミの脳内を席巻する。

はじめに浮かんだのはベンガルの親子だった。

子供の方は産まれて間もないのだろう。よたよたとおぼつかない足取りで母親の周りを駆け回っている。

すると近くの茂みから父のベンガルがやってきて、子供の首筋を噛んで頭上に放り投げた。

落下するベンガルは空中でクルリと姿勢を整えて音もなく見事な着地をきめる。

母と父に挟まれ、子供のベンガルは少し得意そうだった。

その姿が少しずつ薄れていく。その代わりに今度は別の映像が浮かぶ。

辺り一面に広がる砂漠だった。
金の粒が陽光に反射し、神々しい輝きを放っていた。
ここはベンガルたちの故郷なのだろうか。

イズミがその美しい光景に見とれていると、不意に意識を引っ張られる感覚に陥る。

2―16

急速に映像が離れていく。
砂漠の様子も、ベンガルの親子も小さくなって行き、やがて赤と透明の光の前を通り過ぎようとする。

その時にイズミは透明の光に一瞬だけ触れてた。そして意識は現在へと戻る。

「――っ！」

気が付けばブロンドの波打つ髪が鼻先をかすめる。

金属がぶつかり合うような不快な交錯音。見ると乙女の剣がベンガルの爪を防いでいた。
どうやらベンガルの意識に入っている間にマタタビのリラックス効果が切れてしまったらしい。

「イ、ズミ様っ。今すぐお逃げになって……！」

ベンガルの尋常じゃない力と拮抗している。

（いったい乙女の腕力はどうなってんのっ！？）

腑に落ちないながらも、こればっかりは問いてる暇もない。

扉まで五、六メートル。
乙女がベンガルに競り負ければ、一瞬で追いつかれる距離。

本来ならすぐさま乙女の指示に従うべきなのだろう。しかし、イズミはそれに従わない。

先ほどまでベンガルが抱えていたマタタビが足元に転がっている。それを思い切り足で踏み潰した。

潰れたマタタビを間髪置かずに拾い上げ、髪の毛になすりつけた。髪を染めるために使っていたコルカの染料がマタタビにうつる。

そのマタタビをベンガルのはるか後ろの方へ投げてやる。その後のベンガルの反応は目覚ましかった。

じりじりと押していた剣に見向きもすることなく、一直線にマタタビの方へと走り寄と酔ったようにマタタビをくわえる。

「さぁ、今のうちに！」

イズミの叱咤に状況を掴めずにいた乙女も裾をひるがえした。

扉を閉め鍵をかけると、イズミは安堵のあまりその場にしゃがみこむ。

女性の前ではあまりにも失礼な振る舞いではあるが、今回ばかりは乙女も眉根を寄せるような真似はしない。

「ご無事ですか、イズミ様」

「はい…。すみません女性なのに無理させて」

「いいえ。わたくしは戦乙女ですもの。国民の守護が戦乙女の使命ですわ。

それにしても、マタタビが十分しか効かないだなんて…！」

乙女は不思議そうに言う。

「それに、先ほどは何をなさったの？」

マタタビを投げた行為のことだろう。

「私の村は少々特殊でして。医療が変わった発達の仕方をしたんですよ。その知識でちょっと……」

コルカの実とマタタビをあわせると、かなり強力な麻酔になることはなかなか知られていない。

「まぁ。イズミ様は医療の知識もおありでしたのね」

「いいえ、私のはただの聞きかじりですから。……でも良かった。美しい方に怪我がなくて」

にこりと微笑むと、乙女は虚を突かれた顔をする。そしてすぐに満面の笑みを浮かべて頭を下げた。

「ありがとうございますイズミ様」

「いいえ、聖獣の乙女。本題はこれからです。多分ですが、ベンガルの不調の理由が分かりました」

乙女も顔を上げ、真剣な目でイズミを見つめる。頷き、先を進めた。

「ベンガルは普通砂漠に住む妖魔です」

言わずもがなだ。乙女は頷く。

「出産に当たって、ベンガルの母親は母親はお腹の子を守ろうと神経過敏になっているようです」

「神経過敏症が原因……？　でも、そうならないように喧騒から隔離しましたのに」

不思議そうに首をひねる。

「むしろそれが災いしたんですよ。ベンガルは一家族、群で暮らしますから。メスが子を産む時にはオスが飲まず食わずで周囲を警戒する習慣があるそうです」

恐らくそれが問題だったのだ、とイズミは続ける。

2―17

守ってくれる存在は人間だけでなく必要だろう。

「それにお腹の中の子はずいぶん弱ってるようですね。このままでは死産の可能性が極めて高いです。一刻も早く、母体を安定させてやるべきです」

それにはやはり家族が一番だ。雄がいれば外敵に対する備えが万全になる。母体のストレスも些かならず緩和されるに違いない。

「それで、ベンガルの父親はどこに？」

乙女は答えにくそうにうつむいた。

「先日、陛下が……殺してしまえ、と」

「――っ！？」

「余興ですわ。罪人を闘技場に集め、ベンガル相手に勝った者は無罪にしてやる、とおっしゃいまして、その後は……」

イズミはぞっとした。

よもや国王ともあろう者がそこまで腐敗しきっているとは……。兵士たちの不信感が募るのも当たり前だ。

「道理でベンガルから怒りの波動ばかり感じる訳だ。――ったく。いったいどうなってんだこの国は」

乙女に聞こえないように小さく悪態をつく。

「どうしましょう。このままでは……」
「ちなみに国王陛下はこのベンガルについてどう仰っておいでですか？」

こんこんと頑丈な扉を叩きながら聞く。
そしてそこが一番の問題だ。産まれて間もないベンガルまで余興で殺されてはたまったものではない。
それくらいなら、このまま死なせてやった方が余程幸せというものだろう。

子どもが無事産まれるための処置方法は思いついた。しかし、それを提示するには、ベンガルの母子の今後の安全が保証されてからでなければならない。

保護と銘打っている限り、早々に故郷に戻してやるべきだ。

「いいえ。特に何もおっしゃってませんわ。このことはわたくしに一任されてます」

（なら、安全かな？）

乙女の考え方など、詳しくは知らないが、あの素直なミッチェルに好かれているくらいだ。悪い人ではないだろう。子供に好かれる人物に悪い人はいない、がイズミの持論だ。

もっともミッチェルの前でそんな発言をしたら、あのマセた少女は子供扱いするなと怒り狂うだろうが。
自分の想像に思わずクスリと笑みがもれる。

そのあまりにも余裕な様子に何を感じ取ったのか、乙女もこわばっ

ていた表情を緩めた。

「安心して下さい、心優しき乙女。処置方法はあります」
「本当ですか！？」
「ええ。ベンガルの生まれ故郷の砂を用意して下さい」
「砂……？」

あまりにも突飛なことだったのだろう。思いがけない注文に乙女は首を傾げた。

2―17（後書き）

拙作を読んで下さっている皆様ありがとうございます。
お気に入り登録者数も少しずつ増えて嬉しい限りです。評価、ご意見・ご感想もいつでもお待ちしておりますので宜しくお願いします。

あと、活動報告の方で本作の制作裏話的なことを書いてたりします。
お時間ありましたら是非雨木のユーザーページの方からご確認下さい。

それでは、これからも拙作をお楽しみ下さいませ。

2―18

廊下の窓からさす西日が二人を照らす。乙女の零れた金髪が陽光に反射して輝く。その眩しさに、思わず目を細めた。

「私も良くは分かりません。けど、ベンガルが砂を望んでいたので。もしかしたら家族以上に」

「それはただ、あの子が望郷の念にかられているだけではないのですか？」

「分かりません。ただ……」

これまで触れた母体の意識はどれも大抵はピンク色をしていた。ピンク色は母性愛の色。包み込み、慈しむ心だ。しかしベンガルの母親はトゲトゲしい赤色をしていた。赤色は敵愾心、怒りを表す色である。あれでは母子ともに安心できるはずがない。

しかも赤い光に隠れるように、弱々しく明滅していた透き通った無色の光。

あれこそが赤ん坊の意識だろう。本来ならば羊水に揺られ、ただ母の腹の中でたゆたっていればいいだけの存在。

だが、母の怒りに反応し、あまりにも小さなままで意識が半覚醒してしまったため、死の瀬戸際まで追いやられてしまったのだ。

母親も腹の子が日に日に弱まって行くのが分かっている。そのため余計に神経をすり減らし、子を弱らせるという悪循環に陥ってしまったのだ。

これを改善しようと一生懸命になっている意識の中で見たのが、砂漠だったのだ。

あれだけ望んでいるのならば、まだ人には知られていない効果が、ベンガルが住む砂にあるのかもしれない。

「本当にどうなるかは分かりません。それでも、やってみる価値はあると思います」

「……そうですね、分かりました。お任せすると言ったのはわたくしですし。

砂漠の砂を取り寄せてみますわ。どれくらい必要になりますかしら」

「出来るだけ沢山。この部屋いっぱいになるくらいまであれば……。可能ですか？」

聞いてみる。

「お任せくださいませ。戦乙女の名前にかけて三日……いいえ、二日でやってみせますわ」

力強い肯定を聞く。後は任せても問題ないだろう。

二人はやっと穏やかな表情で微笑みあった。

薄暗くなった辺りの暗闇を払うように、月光が優しく二人を包み込む。

2―18（後書き）

二幕はこれで終了です。
引き続き三幕をお楽しみ下さい。

第三幕：始まりの鐘３－１

宿屋に帰ってきたイズミは、入り口でラズに声をかけると返事を待つことなく二階へ上がる。

「ふぅ……」

（久々に力使った、なぁ）

ベッドへとダイブし、目を閉じる。急速に疲れと眠気が襲いかかる。イズミは抗い難い睡魔に身を任せ、夢の世界に意識を手放した。

金色に光る麦穂が眼前に広がる。爽やかな秋の夕暮れの風が頬をなでては通り過ぎてゆく。

あと一週間もしないうちに麦は収穫の時を迎えることだろう。

「やっと……ここまで来た。人生五十年。短い人の世も終盤に来てやっと実りを見せた」

老人と言うにはまだ幾ばくか若い男は穏やかにひとりごちた。

「ラー・ラダ様」

後ろから声がかかる。

常に揺らぎを見せることのない忠実な部下だ。長年の変わらぬ忠誠からその冷静な声色だけで彼女だと分かる。

「なぁ、セシリア。そう思わぬか？」
「御意にラー・ラダ国王陛下」
「ふふ、国王か。随分な高さまで来てしまったことよなぁ。この金に光る麦穂が見たいがためだったと言うのに」
目を細めて、いまだ沈まぬ夕陽に映える麦穂を見つめる。
セシリアはラー・ラダより数歩下がった位置で同じ景色を共有する。
「三十年前はここも荒れ地だった。草一本と生えぬ、人の恨みある血ばかりを吸った乾いた大地であった」
「全て陛下のご尽力の賜物かと」
疑うべくもないラー・ラダの力だとセシリアは言う。ラー・ラダはゆるゆると首を振った。
「それは違う。確かに神が与えたもうた奇跡の力で戦乱の世を平らかにすることはできた。だが土地を耕したのは誰か。私ではなく民だ。種を蒔いたのも民。全て民の力だよ。私は初めの一歩に手を貸したに過ぎぬ」
英雄王と民に賛美される賢王はどこか寂しげに、そして満足げに笑みを浮かべた。
王が噛みしめているであろう幸福と苦味をセシリアは邪魔しない。それが唯一、王に許されたささやかな安らぎであることを知っていたからだ。

しかし、やがて王も現実へと帰還する。

「心残りがあるとすれば、世継ぎ足り得る者を見いだせぬままであることか……」

「じきに見つかりましょう」

「じきとはいつだ。天下太平五十年、いつ死ぬとも限らぬ身ぞ。今さら命など惜しくもないが、まだ治まりきらぬ世を遺しては逝けぬ」

ラー・ラダは首を降って静かに目を閉じる。

数瞬の後に開いた眼には、何かを決意した者特有の強い光が宿っていた。

「セシリア、頼みがある――」

3―2

ドンドンと扉を強く叩く音でイズミは目を覚ました。夕べは湯浴みもせずに寝てしまったらしい。

ベタベタと肌に吸いつく服の気持ち悪さに顔をしかめ、ベッドから起き上がる。

（夢なんて久しぶりに見たな……）

意味ある夢だけでなく、たわいもない夢も最近ではとんと見なくなった。

そんな中で見たラー・ラダとセシリアという男女の主従の夢。あれが夢である限り何の意味も持たないことをイズミは知っていた。それでもあのラー・ラダ呼ばれていた男の国王陛下という敬称の意味を考えるのだ。

久々の夢を反芻しつつ、体を拭くために上半身を朝日にさらす。

「早く起きなしゃ――ぎゃぁぁあぁっ！！」

それまで扉を叩いていたらしいミッチェルはしびれを切らし、勢いよく扉を開けた瞬間叫んだ。

小さな両手で目を覆うが、指の隙間からはしっかりとキラキラおめめが覗いていた。

「ぎゃあって。色気がない……のは仕方ないけど、失礼だなぁ」

一瞬、色気のある少女というものを想像し、恐ろしさのために訂正を入れる。
ミッチェルは、なおも服を着ないイズミに真っ赤になって反論する。
「とにかく、服を着なしゃいっ。なんで朝っぱらから裸なんでしゅか。お前はりょしゅちゅ狂なんでしゅねっ」
「りょしゅちゅ……？　ああ、露出狂」
そう言って納得しつつも、体を拭く手を休めることはしない。したがってイズミはいまだに上半身裸である。
ミッチェルは顔を覆うのを止め、目を泳がせながらもビシリと指を突きつける。
「ふ、ふ、服を着なしゃいっー！！」
「そんなこと言われても、まだ拭いてるんだから。と言うより、男の裸を見るだなんてミッチェルちゃんのエッチ」
ハートが付きの口調で言われたミッチェルは、首まで真っ赤になる。どうやら脳がオーバーヒートを起こしているらしい。
「と、とにかくっ。早く下に来なしゃい。朝ご飯の時間でしゅからねっ」
茹でタコのようになったまま、ミッチェルは回れ右をして、イズミの部屋から駆け出した。

バタンと音を立てて扉が閉まった後、イズミはベッドに突っ伏して笑いをこらえた。
こらえてはいるが、こみ上げるものは仕方ない。ブルブルと震える肩を見る者がいないのは幸いというとこだろう。

ひとしきり笑って満足した後、階段を降るとベーコンの焼ける香ばしい匂いが漂ってきた。それにつられてイズミの腹が鳴る。

階段とは反対側にしつらえられた両開きの扉を開くと、一気に覚醒する。寝ぼけ眼もどこへやら。

質素ではないが、決して華美とは言えない宿全体の雰囲気とは打って変わり、宿と同じように上品にまとめられているものの、五つ星レストランのように華やかさを持つ広間だった。

3―3

冗談にも食堂などと言うこともはばかれるが、昨日店の主人であるラズ自身が食堂と言っていたのを思い出す。
するとなんだか無性におかしくなり、親子共々笑わせてくれる愉快な人たちだ、と肩を震わせた。

「やぁ、ミスター。君の席はこっちさぁ」

声がかかる。
顔を上げてみると、そこにはひょろりと長い手足、これといった特徴もない赤茶けた髪にお揃いの瞳。
昨日城で出会った、ハンコックであった。

ヒョコヒョコと、長い手足を持て余し気味に、奇妙な歩き方でイズミを案内する。

一目でそれとわかるアンティークものの机には、清潔感溢れる白いテーブルクロスがかけられており、バラの刺繍が見事なランチマットが用意されていた。

ハンコックは椅子を引いて、給仕よろしくイズミを座らせると、ナイフとフォークを置いて、その場を下がる。
ふと窓の外を覗けば、まだ朝も早いというにも関わらず、人々が行き交っていた。

それから間髪置かずに、ミッチェルが危なげなく料理を運んでくる。
それは幼くとも普段からきちんと手伝っている証拠だろう。

焼きたてのバターパンに、オニオンスープ。みずみずしいサラダに、自家製ドレッシング。カリカリに焼いたベーコンとスクランブルエッグは、イズミの朝食のベストメニューだ。

豪華なテーブルには、似つかわしくない庶民的な朝食かと思いきや、意外にも真っ白なテーブルに柔らかなパンの色や、色鮮やかなサラダの色がよく映える。

イズミには祈りを捧げるべき神はいないため、食前の祈りなどで料理を冷ますことはない。

さっそくパンに一口かぶりつく。脇にはバターやジャムがあったが、そのままでほんのりと甘く、むしろ何も付けないのが正解であるかのように口の中でふわりと溶けてしまった。

次にスープを口にすると、秋の肌寒くなった空気に晒された身体に、暖かさが染み込んでゆく。

なるほど、ラム酒と子羊亭は確かに一流の宿だ。

サラダもスクランブルエッグも、あらかた食べてしまうと、ようやくイズミは周囲を見回した。

どうやら周りで食べている客とはメニューが違ったようだった。

食べ終えたのを見計らって、ハンコックがコーヒーを注ぎにくる。注ぎ終われば すぐに席を離れるだろうというイズミの予測は外れる。どういったことか正面に腰掛け、自らも挽きたてのコーヒーを啜り出したのだ。

何を言っていいのかわからず、イズミはカップに口をつけたまま思案した。

3―4

先に口火を切ったのはハンコックだ。
カップをソーサーに戻すと、人好きのする笑みを浮かべてイズミに問う。

「食事はお口に合いましたか」
「あ。はい、とても。私のだけメニューが違うようでしたが」
疑問に思ったことを口に出す。
「夕べは何も食べてない様子だったからさねぇ。朝は食べやすくて消化に良いものの方が良いと思って」
「お気遣いありがとうございます、ミスター」
「敬語じゃなくていいさ。それと、話しやすいようにハンと呼んでくれると嬉しいさぁ」
「それじゃあ俺のこともイズミと」
頷き、微笑むハンコックを見てイズミはやっと思い出す。
「そうか。トリア様に似てるんだ」
どこかで会ったことがあると思ったのは、国のいたるところに飾られている（なぜかこの宿屋には一枚も飾られていない）現国王一家の肖像画のせいだった。

国王は正室の他に、五人の側室を持っていたが、三番目の側室との間以外には子を成さなかった。
三番目の側室の名をフレジアと言い、他の側室ほど若くはなかったが、事によっては正室よりも寵愛していたふしがあったと言う。

そして寵愛を受けるに相応しく、フレジアの器量の良さには誰もが舌を巻くほどであり、その聡明さは目を見張るものがあった。

そのフレジアとの間に今から十九年前に、一人の男児をもうけた。
待望の世継ぎということも手伝い、男児の誕生は国を挙げて祝われ、諸国からの来賓も大勢呼ばれた。

国王は男児に古語で希望を表す、トリアと名付けた。トリアはすくすくと育ち、母のフレジアに似て幼い頃から優しく聡明であった。
ただでさえ待望の子であったと言うに、それが良くできた子とあれば可愛くないはずがない。

国王はこれでもかとばかりにトリアを可愛いがり、ひいてはその母であるフレジアに更に目をかけるようになる。

しかし、順風満帆であった国王に数々の困難が襲いかかった。
ひとつは先王の時から王家に仕え続けていた、賢相と名高い宰相の死であった。政に疎い国王の代わりに、政治を一手に担っていた宰相の死により、宮廷内の情勢は一気に変わってしまった。

その最たることが、穏健派の第一党である宰相と、ことあるごとに反目し続けてきた急進派の大将軍らが権力を握ることになったということだ。

3―5

王は政に興味を持てず、全てを臣下に任せていた。そのため国を運営することなど国王にできるはずもなく、大将軍の言うがままに国を動かすことになってしまったのだ。

不幸中の幸いか、大将軍は政治的手腕に優れていた。しかしそれ以上に野望に溢れていたのだ。そんな彼がまずはじめに行ったのは、宮廷内での軍部の権力回復であった。

いや、軍に権力がなかったとは言うまい。

しかし、それまでの国内情勢は軍に優位ではなく、それどころか宰相の手によって文民統制を推し進められていたのだ。

政に興味を持てない国王に代わり政府を動かす者が必要と考えた宰相は、その政の大半の権限を宰相という役職自体に持たせた。そして、宰相になれる者を法律によって厳しく定めることにしたのだ。

諸々あるが、その最たるものは宰相には軍部に所属している者、もしくはしていた者はなれないということだ。この決まりを文民統制と言う。

大将軍のような者を権力から遠ざけるためだったのだろう。宰相が生きている間は宰相が作った法はよく機能していた。しかし没した直後からはそれを継ぐに相応しい者が見つからず、三度ほど宰相の席は巡った。

そしてとうとう大将軍がその役を手中に収めることになった。その後、大将軍と宰相の兼任に伴い大きく法の改正が行われることになる。

宮中のごたごたが続く中、まるで平穏など許さぬとでも言うように更なる不幸が国王を襲った。

溺愛していた息子の突然の病死である。そのとき国王は五十近く、トリアはわずか十歳であった。王の年齢的に再びの世継ぎは望めないだろうと言われ、それは今に至るまでまさにその通りであった。

悲しみに暮れた王はあろうことか、大将軍に先んじて戦を始めたり圧政を敷いたりと、暴君となり果ててしまったわけだ。

そんなお国事情を思い出し、イズミはハンコックの顔をしげしげと見つめる。

「やっぱり似てるなぁ〜。十歳までの肖像画しかないけど、なんか似てるんだよね」

「僕がトリア様に？　ふふっ、イズミはなかなか鋭いさ」

ハンコックは面白そうに目を細める。

「ミチェはあの通り金髪碧眼じゃないけど、先祖返りのせいで天啓を持ってるさねぇ」

イズミの空になったカップにコーヒーを注ぎ足す。

「と言うことはさぁ、必然的に僕も真祖の血を引くってことになるワケ」

先祖返りこそ起きなかったが、ハンコックには王家と似た顔の造作になったということか。

イズミは血の不思議を感じる。

「ところで、僕も聞いて良いかな」

「もちろん」

「昨日のことなんだけど……、あぁ、大まかなところはミチェに聞いたさぁ。聞きたいのは結局イズミはどうやって対処したのかってことなんさ」

問われるままに解決策を乙女に教えたのだと言う。

「そのときにベンガルと話しをしただけだよ」

「話せるんさ？　妖魔と？」

ハンコックは思わず瞠目する。

「俺も一応真祖の血を引いてるから」

イズミの告白に、ハンコックは呆気に取られた。

「と言っても大した力もないよ。せいぜい動物か、飼い慣らされた妖魔と話せるの程度」

「でも、ベンガルほどの妖魔を相手にできたんさね」

「あれは俺の力じゃないもの。ベンガルは妊娠中だったからね」

不思議そうな顔をしているハンコックに、力を持つ者が必ず受ける講義の初歩を説明する。

「一つの命の中にもう一つの命が宿るのは通常では有り得ない状態だよね」

ハンコックが頷く。

「それと同様に、意識の中に別の意識が共存するのも本来は有り得ない状況なんだ。真祖の血を色濃く引く人の中には、心を読む力を持つ者もいるらしいけど、そういうのは本来有り得てはいけないことだから、決して長時間心を読むことはできない」

これは原則、とイズミは真剣な顔で説明を続ける。

3―6

「もし長時間相手の心を読み続けたらどうなるんさ？」

どうしてかは分からないけど、とイズミは前置きする。

「どちらか一方の心が駆逐される」

「死ぬってこと？」

横に首を振ってみせる。否定。

「死の定義をどこに置くかで違うよ。例えば読む方が勝ったとするでしょ？　そしたら負けた方の心は消え去る。だけど体はそこに残るんだ」

「それじゃあ心神喪失状態になる？」

「広い意味ではね。心の無くなった体は、家主のいない家とおんなじ。家と違うのは二度と家主は戻ってこないってことかな」

眉をひそめるイズミをどう思ったのか、ハンコックは言う。

「イズミはずいぶん力について詳しいんさねぇ」

「俺の村は色んな意味で特殊なんだ。村人のほとんどは真祖の血を色濃く引いた者だからそっちに関する勉強は嫌というほど受けさせられてさ」

そんな村があるとは露ほども思わなかったのだろう。にわかには信じがたいと顔に書いてあった。
イズミはいまだに茶色く染まっている髪をいじりながら、穏やかに言う。

「ゴミ捨て場なんだ。貴族や王族の庶子たちの」

「そんな……！」

「もちろん多少の不便はあるけど他は普通の村と変わんないよ」

「でも、だからって」
「村人同士で結婚して、子供をつくって、老いてゆく。誰もが普通の暮らしを営んでるんだ。そういう憐れみ方は俺らに対する侮辱だよ、ハン」

鋭く眼光で制す。
諭されハンコックは己の傲慢を恥じた。

「話がそれちゃったけど続けるよ。俺が出来るのは妖魔と会話するだけなんだけど、昨日は明らかにベンガルの心に入り込んでた。それは俺の力なんかじゃなくて、ベンガルに呼ばれたからなんだ」

「心を開いたってこと？」

「そう。妊娠中は狂うことなく他の心、いわゆる意識を育んでいる状態だからね。それで、そういうときは外部からの意識も入り込みやすくなるみたい。だから心ごと見れたんだろうね」

言葉を切ってぬるくなってしまったコーヒーを飲み干す。

気づけばずいぶん話し込んでいたらしく、食堂にはハンコックとイズミの二人だけが取り残されていた。

「それじゃ、そろそろ部屋に戻るよ。おいしいコーヒーをありがとう」

立ち上がるイズミをハンコックは引き止める。

「イズミ、なぜ僕にそんなに詳しく話をしたさぁ」

話した内容の中には国家機密レベルの重要事項もあっただろう。機密漏洩がバレれば共倒れも考えうる。そんな愚を犯してまでイズミが明かした理由が釈然としない。

イズミはハンコックと視線を合わせた。

「そうだなぁ……。目的を達成するため、かな」

意味深長にイタズラっぽい笑みを浮かべ、イズミは食堂を後にした。

3―7

部屋に戻ると昨日ピエロからもらった風船が、部屋の左奥でプカプカと浮いていた。

（侵入されたな……）

イズミが部屋を出るとき、風船は左端の手前天井にかかっていた。退室してから扉に付いている小窓で確認したから確かだ。

室内に隙間風が吹くような造りはしているはずがない。だとすれば人の出入りにほかならないだろう。

従業員の掃除の可能性はあるが、その割にはベッドが起きた時のままだ。

寝室の他はバスルームと、子供が隠れられる程度のクローゼットだけ。人がいる気配はしないが、用心するにこしたことはない。イズミは無言でバスルームの戸を開いた。

「……」

誰もいない。

続いてクローゼットを開く。中にはハンガーがいくつか置いてあるだけだった。

ベッドの上に置きっぱなしにしていた多少の着替えや路銀の詰まった袋は、何者がが触った形跡がある。一見してそれとはわからぬように戻してあるが、イズミの洞察力と記憶力は簡単に看破してしまう。

荷物袋を調べてみるが何か盗まれたものもなく、路銀でさえ一朱銀たりとも盗まれていなかった。

（なにが、目的だ……？）

無意識のうちに胸元に手が行く。

そしてハッと気付いた。

（侵入者は俺の身元を調べたかったのか？）

そう考えると侵入者が何も盗まなかった理由に合点がいく。しかしその場合、考えるられる侵入者の正体がかなり限られてしまう。そして考え得る何者に対しても、自分の素性がバレては少々まずい。

「村の追っ手か、それとも王城の手の者か……」

村の追っ手だとしたら、十中八九イズミがここに滞在しているとバレているだろう。

しかし目的はどうあれ、王城の手の者であればイズミの氏素性はバレてはいない。

領主《義父》が王に報告したのかとも考えたが、その可能性は直ぐさま捨て去る。

「虚栄心に富んだ愛しの我が義父（ちち）は、自衛と見栄から脱走者が出たなんて報告はできないはず……」

何にせよ幸いなことに荷物袋の中には、名や生まれがわかるような

ものは入っていない。

イズミの素性を辿れるものと言えば、誓いの証となる首飾りと天馬の証明書ぐらいである。

天馬の証明書もマズイが、誓いの証はもっとバレてはいただけない。証は一人一人持っているものが違のだ。

王族と貴族しか持つことを許されていない上、特権階級の中でも家柄によって紋様や使われる色が異なる。そのため、多少知識のあるものなら割と容易く身元が判明してしまうのだ。

だが、イズミはどちらも肌身離さず持ち歩いているため心配はない。特に首飾りは胸元にしっかりとしまってあった。

「どちらにせよ……」

ぽつりと漏らす。

（警戒が必要かな）

ペンダントを握りしめたイズミの表情は、決意に燃えていた。

3－8：蜜議

「マリオン様」

砂の搬入のため、手続きを急ぐ乙女のもとに一人の老僧が訪ねてきた。

「ウィーバー様」

乙女マリオンは椅子から立ち上がり、老僧を対面式のソファに促す。

「宮廷までお越しになるなんて。呼びつけてくだされば参りましたのに」

「いやいや。なにやらマリオン様はお忙しいご様子。お手を煩わせるわけにはいきますまい」

そこに下女が卒なくお茶を持って来る。ウィーバーは下女に礼を言って口をつけた。躊躇いも毒味もなく出されたものに口をつけるということは、老僧は乙女に絶大な信頼を置いているということだ。

もっとも、貴人同士とは言え、ファーストネームで呼び合っているところから、安易に想像つくことではあるが。

「申し訳ありません」

「なになに。こう年をとって偉そうな役職につけられると、やることがのうなってしまいましてな。実のところ暇を持て余していたの

ですよ」

呵々と笑うウィーバーは僧官の最高位たる大僧正である。

先の宰相がつくった法の中に、政教分離があった。

祭典、式典等の諸々の定めあること以外において、政に宗教を関わらせないという考え方である。

この国の主教は遍教と決まっている。遍教はよく国内に浸透し、遍教が及ぼす効果というのは計り知れないものがある。更に国外でも相当数の信者を抱えている。その影響は図らずも強大だ。

そのため欲深な現宰相は朝廷にのみ収まらず、これをも利用しようとした。しかしウィーバーを始め、遍教の僧たちは賢くもそれを望まなかった。

当時まだ僧正だった彼は「法を撤廃した。助力を願いたし」との大将軍よりの要請に「政教分離の法は双方の合意ありて成したもの。撤廃も合意なくしては成り得ぬ」と切り返した強者である。

そして切れ者であった当時の宰相と大僧正は、文面にハッキリと「相互合意なくしての撤廃を赦さず」て記した。それはいくら時の宰相と言えど、変えることの出来ない法であった。

要請より九年が経ち、大僧正になった今もウィーバーの考えは変わらない。

そのため、ギリギリのラインでこの国の完全なる荒廃は防がれていると言えよう。

「年寄りのヒマに付き合わされるのも迷惑だとは思いますが、ちょいと相談事を聞いていただけますかの」

「迷惑ではございませんわ。なんなりとお申し付けくださいまし」

「ほほ。それでは遠慮なく。もしかしたら頼み事になるやもしれませぬが」

ウィーバーは好々爺然とした表情を崩さず話し始める。

「どこから話しましょうか。……話はワシの弟子が聞いてきた噂が事の発端だったと言えましょう。まずはそこからお話ししましょうかの」

それはこんな噂だったと言う。

――トリア王子がご存命である。

曰わく、城下でその姿を見た。いや、不還の森で見かけた。だの、国外でその姿を見かけたと言う噂まであった。

3―9：蜜議2

こんな時世だからこそ、そのような噂が流れるのだろうと、最初のうちウィーバーは気に留めることはなかった。
しかし、聞けばそれらの噂には妙な尾鰭が引っ付いていたのだ。

――トリア王子が逃亡なさったのは正室様の嫉妬から逃れるためだ。
――正室様は大将軍と関係を結んでいた。不義の子までもうけていたとか。

まことしやかにささやかれるそれらの噂の多くは、根も葉もない荒唐無稽なものであった。

だが、いくつかは宮廷の中心部にいる者しか知らないような話も出てきたため、看過出来なくなったのだ。

「……それで噂の出所を探ろうとしたんですがな。これがどうにもつかめない」
「奇妙ですわね」
「気にするほどのことではないのかもしれないませぬが、どうにも気になりまして」

ウィーバーは法衣のたもとをたくしあげ、皿の上にあるクッキーを摘まんだ。

「そういえば、わたくしも妙な噂を聞きましたわ」
「ほぅ……？」
「近く、陛下がリュミエス帝国に宣戦布告なさると……。そのような噂を耳にしましたの」
「リュミエス帝国に？」
聞き覚えのなかった噂らしく、ウィーバーは垂れ下がる眉を上げた。シワの中に隠れる小さな瞳は、事の真偽を確かめるように鋭く光っていた。
「騎士団の中では割と有名な噂ですの。戦乙女のもとにも届いておりますわ」
「しかしリュミエスと言えば北の大国。それに同盟国ですな」
「まさか、とお思いでしょう？　これがあながち噂と笑い飛ばすこともできませんの」
乙女はため息をつく。
「現に武器の強化を急がせていますし、敗国からの上納金も何につぎ込んでいるのか……。皆目検討がつきません。このままでは国庫も直に底を尽いてしまいますわ」
「ほんに、妙な話ですのぅ」
国を憂える二人は同時にため息をついた。

3―10

イズミが初めて城を訪れてから二日が経った。
あれから部屋を探られた以上の変わりはなく、イズミも毎日職探しと城下見学にいそしんでいた。

三日目の朝、食堂に行くと朝食を運んできたミッチェルから一通の手紙を受け取った。戦乙女からイズミ宛てのものだ。

『砂の搬入が済みました。本日王城へおいでください。先日いらした部屋の前でお待ちしております。尚、同封しております書状を入り口でお見せ下さい。』

同封されていた書状は、イズミの案内を頼む旨が書かれていた。
その下にはマリオン・ノクト・ジェンナーの名と、家紋印が捺されている。

イズミはそれを信じられない思いでまじまじと見つめた。

「鷲を象った家紋……！　ジェンナー家の息女だったのか」

ジェンナー家と言えば代々、王家と婚姻関係を結んできた家である。

「ああ。だからミッチェルが先祖返りなのか」

ジェンナー家のように頻繁に王族と婚姻を繰り返した家の者は、他家に比べて力が発現する確率が高い。そのジェンナー家と遠くはあるが、縁戚関係にあるミッチェルの家も、先祖返りが出るのも予想に難くない。

ましてジェンナー家は今や名目だけに成り果てたとは言え、五色貴族だからなぁ」

真祖と呼ばれる直系に、国の興りから仕えていた五人の者たち。その者たちが興した家が、五色貴族と呼ばれる由緒正しい血筋だ。本来なら国内でも大きな勢力として王に仕えて然るべきなのだが、一家は既に没落し、残る四家も大将軍の支配する十年の間に弱体化を押しとどめられなかった。

いや、相手が宰相の地位を手に入れたとは言え、大将軍だけであれば屈することもなかったろう。しかし大将軍は、己の采配が効く範囲がいかほどであるかを正確に知っていた。

さすがに五色貴族全てを陥れることが不可能であると踏んだ大将軍は、国王に耳打ちした。

先の宰相が死んだのは、果たして寿命だったのか……と。

宰相が亡くなり、唯一の王子も病に倒れた矢先の進言だ。不安で満ちた心に、猜疑が生じるのはたやすかっただろう。

後は国王のもとに“証拠”を二、三届けさせれば良い。疑心暗鬼になった者には何ら疑う余地などありはしない。

こうして、国王の信を失った五色貴族たちは、瞬く間に弱体化していった。

国王の信を失い、弱体化したとは言えど、未だ国民からの支持は厚い。むしろ圧政を敷く国王への不満から、五色貴族たちへの同情を集めているのだ。政に口出し出来なくなった今でも、転封されなかったのはそのおかげと言えよう。

愚王たりとも五色貴族を潰した後のことを考える頭は残っていたと見える。

そんな理由から、五色貴族は未だ以て特別な存在なのである。偶然の為せる技にしても、乙女とのパイプが繋がったのは今のイズミにとって僥倖。大変喜ばしいことであった。

後はそのパイプをどれほど太く、確固たるものにできるか、それが問題だ。

そんなことをつらつらと考えつつ、イズミは王城への出立の準備を急ぐのだった――。

３－１０（後書き）

話もだいぶ長くなってきましたが、ここまでお付き合いいただいた方々、本当にありがとうございます。
拙作「空の玉座」はいかかでしょうか。至らない点など数多くございますが、ぜひともアドバイス・感想・評価等をいただけたらと思います。

また、皆様の優しさにより成り立っているわたくし雨木が少しでも恩を返そうと活動報告の方で番外編を書かせていただいたりしてますので、お暇ございましたらユーザーページの方から覗いていただければ幸いです。

まだもう少し話が大きく動くことはありませんが、しばらくお付き合いください。

3―11

手紙を受け取った日の昼を過ぎてからイズミは王城にやって来た。前回は南門に行き、名前を記入して中へ入ったが今回は正門から入城する。

供の一人も連れず、茶の髪をたなびかせたイズミに門兵は眉をひそめた。だがそんな態度もマリオンから預かった証書を見せると感心する程に一変する。弱体化したとは言え、五色貴族の威光はやはりまだ有効のようだ。

イズミを中に通すと、待ち構えていた数人の召使いが、イズミに頭を下げる。

案内された部屋はベンガルのお産室ではなく、細部にいたるまで豪奢な飾りを施された湯殿だった。

「あの、これは一体……？」

困惑の声を上げるイズミに、召使いの女は表情を変えることなくうやうやしく告げる。

「ジェンナー様よりおもてなしするよう承っております。まずは湯船にて汚れをお落としください」

失礼な。きちんと毎日湯浴みをしてるぞ、とは三日前に疲れ果てて眠りこけてしまったイズミの言える台詞ではない。しかしそんなことよりも今は重要なことがある。湯船に浸かってしまっては、髪を茶色にしている染料が落ちてしまう。この場に染料になるコルカの実があるわけでもなく。かと言って、素の金髪のまま宮廷を闊歩す

る気にはならない。
そんなことをしてみるといい。即効で捕まって尋問の後、拷問のフルコースに決まっている。

「入浴には私どもが誠心誠意お手伝いさせていただきます」

（イ～ヤ～だぁ～！）

バレるのが嫌と言うのもあるがそれ以上に嫌なのが他人の手である。貴族ならば下女に入浴を手伝わせるのも当たり前だ。しかしイズミは村にいた頃でさえ、他人に触られるのが嫌で一人で入浴していたくらいだ。

「あの、このままじゃ」
「ダメです。ジェンナー様にお会いするのに、そのように汚れたままではいけません」
「ですよねー」

そうは言うものの、そこまで汚れているわけではないのだが。
染料であるコルカの実のストックが少ないため、髪を洗うことはできないものの、きちんと毎日シャワーを浴びている。

「さぁ」
「……わかりました。でも、入浴は一人でできますから」

そこがせめてもの妥協点、とイズミは頑として譲らない。召使いの女は渋々ながらも、他の下女たちを下がらせると、着替えとタオルを渡して自らも下がった。

シャワーで頭を洗い流す。
染料はみるみるうちに取れ、もとの発光しているように淡く光る金髪に戻る。

湯船にしばらく浸かってから脱衣場に戻ると、備え付けの鏡に姿が映し出される。

程よく引き締まった肉体。スラリと長い手足。そして何より、輝く金髪と星の光彩が散らされた碧眼が印象的だ。
その色合いは貴族よりも王家の始まりである、真祖に近いように思われる。否、事実ほとんど真祖のものと変わりはない。

鏡に映る姿にため息が抑えられないのも仕方がないことだ。

3―12

手早く用意された衣服を身につける。絹の滑らかな手触りが気持ちの良いゆったりとした衣服だった。

法衣、と言って良いのか。

上下が別れておらず、ストンと着れてしまうタイプだ。今の状態に遍教特有の紋様を施された飾りベルトと、羽織りをあわせれば法衣と断定できるのだが……。

用意されたものは、飾りベルトの代わりに、帯剣できる実用的な軍用ベルトを。羽織りの代わりに、左胸だけを隠す革製の鎧だった。

鏡に移った姿は、珍妙な組み合わせとは思ったものの、なかなか似合っていた。しかし髪が茶色であった時はそこまで目立たなかった目も、金髪になった途端、自己主張を始める。

「う～ん……。まだバレたくないしなぁ。特に宮廷なんて最悪だよね」

誰にともなくつぶやく。

イズミは着てきた洋服の上着をつかみ、おもむろに引き裂いた。袖を引きちぎり、一枚の布にしてしまったイズミは、それで頭を覆った。はみ出た髪をしまい込み、キュッと後ろで裾を縛る。

あとは目深に布を下ろし、心持ち節目がちにいればさして問題はない。

「冬でなくてよかった」

冬だったら厚手の上着を着ているだろうから、引き裂くのは難儀だろう。そこだけはまぁ良しとしよう、と無理やり自分を納得させた。

そこへちょうど先ほどの召使いがやってきた。

「湯浴みはお済みですか？」

「あ、はい」

さすがプロだ。バンダナのように頭を隠したイズミを見て、召使いは眉の一つも動かさなかった。

「着ていた服はこちらでお預かりいたします。帰る折に私どもに言っていただけば、お返ししますので」

上半身裸で帰る羽目にならないように、報酬に上着をねだろうと情けないことを考えて頷く。

「それでは、こちらへ」

促されて廊下を進む。すれ違う武官や文官たちは、イズミの法衣なのか武人用の服なのかわからない服が奇異に映るらしく、じろじろと眺めてくる。

案内がなければ確実に道に迷っていただろう道程を行くと、一つの部屋の前で歩みを止めた。いよいよ、マリオンに対面かと気を引き締める。

（なんとか、王城での仕事を斡旋してもらえないかな）

実のところ、イズミには当初から少なからずその思いがあった。金

の髪を持つ乙女を見て貴族なのだろうとは思ったが、まさか五色貴族だとは予想だにしなかった。

国の中枢核の人間に力を知られたくはなかったが、幸いにして乙女は追及してこなかった。それがどのような思惑からか知らない。それでも五色貴族と知ったからは“繋ぎ”を持つつもりだ。

3―13

「失礼します。お客様をお連れいたしました」
「お入りなさい」

応えがあり、内から扉が開かれる。もったいぶって、ゆったりとした動きで扉が開ききるのを待つ。
そして顔を上げ、唖然とした。

「お、王妃殿下っ！？」

そこには国王陛下の正室が座していた。王妃はわたわたと狼狽するイズミに歩み寄って腕を取り、中へと招き入れる。

「よく参られた。さぁお座りなさい。……クゥナ、人払いを」

召使いの名を呼び、全ての人を部屋の外へと退出させてしまう。とりあえず危害を加えようといった意図はないようなので、促されるままにソファに腰掛けた。
いまだに呆けたままのイズミも、ここへきてなんとか正気を取り戻す。まずは挨拶をしなくては。

「誉れ高き陛下の最愛の方であります、王妃殿下にはご機嫌麗しく――」

続けようとした言葉は、王妃みずからの手で止められた。
イズミの挨拶の口上を制止すべく軽く挙げられた手は、そのまま頬杖となる。

「堅苦しい挨拶を妾は好まぬ。毎日毎日同じよう挨拶を聞いているのだ。飽きもするとは思わぬか。のう、イズミ」

「……！」

イズミは息をのむ。

「なぜ、私の名を」

名を知られているということは、イズミの出生まで知られている可能性がある。そうなると、王妃にとってイズミは邪魔にしかならない。

王妃に関しては良い噂をあまり聞かない。常に冷淡で容赦ない性格から、アイシークイーンとすら囁かれている人物だ。

いささか緊張した面持ちで対峙するが、背中をイヤな汗が流れてゆくのを止められずにいた。

「宿を調べさせてもろうた」

あれは王妃の手の者の仕業だったのか。しかし腑に落ちない。あれらの中にはイズミの名前が書かれたものはなかったはず。

「宿の記帳を見たのじゃ。名はそれで調べた」

イズミは内心ホッとする。

記帳に本名で記したのは完全なる失敗だか、あれには名前しか書いていない。少なくとも、村の名がバレていることはないだろう。

しかし安心するにはまだ早かった。王族・貴族の庶子が集まる村から、能力者が逃げ出したことが王に連なる者たちには知らされているということもある。

義父が告げなくとも、村を囲む直属兵が気付いたのかもしれない。

（少なくとも一週間は感づかれないと思ったんだが……どんだけ派手に動いたんだよ。無能野郎（バカオヤジ））

女の領分ではないと言え、王妃が知らぬという確証はない。更に言うなら、すべてを知っていてそれで宿を探らせたのかもしれない。

「それでは、殿下は私を如何なさるおつもりですか」

「何もせぬわ。妾はなれの名より他は知らぬ。なれが罪人でも聖人でも、構わぬ。ただ聞きだいことがあるだけだ」

王妃はキッパリと言い切った。

「それは……」

嘘と裏切りの世界である宮廷で生きてきた者の言葉を信じきることはできない。

「信じることができぬかえ？」

イズミは首を振る。王妃は知らないと言った。それならば真偽はともかく、イズミの素性にとやかく言わないということだ。たとえ、村からの逃亡者でも、イズミを捕まえる気はないというひとつの意

思表示に違いない。

だから、乗ってみるのも良いかもしれない。

「いいえ、あなたのお言葉を信じます」

イズミの言葉に頷き、王妃はついと口端を上げた。

3―14

「なれが、ジェンナー家の息女に呼ばれているのは知っておる。陛下のベンガルの世話は難儀だろう、すまぬな」
「え……？　あ、いえ」
いきなり思いもしなかった労いの言葉に、イズミは一瞬何を言われていたのか分からなかった。
「回りくどいのはよそう。なれに聞きたいことはひとつじゃ。――トリアの行方を知らぬか」
「トリア様の？」
九年も前に死んだ王子の名だ。
「あの方は、亡くなられたのでは？　国を挙げての葬儀も執り行いましたし」
イズミの村でも喪旗を挙げた。庶子とは言え、王家の血を引くイズミも一週間の喪にふしたのだ。
「空の棺を葬ることを葬儀とは言わぬ」
「どうゆう」
ことだ。と続ける前に王妃は答える。
「妾は知らぬ。噂以上のことは、な。事の真相を知るのが誰かさえも知らぬ」

「あいにくですが、殿下の満足する答えを私は持ち合わせておりません」

「別に満足のゆく答えでなくても、真実であればよい」

「申し訳ありませんが」

「トリアはどこへ行った。まだ生きておるのだろう？」

「私には分かりかねます」

「別に咎めはせぬぞ」

再三の問いにも、イズミは首を振る。王妃は厳しい顔でイズミを見つめた。息が詰まるような緊張を破ったのは、王妃のため息だった。

「なれも頑固よの。何をトリアに義理立てしておるのかは知らぬが」

それは追及を諦めるという王妃の白旗宣言だった。

「トリア様が村にいらっしゃったことはありませんよ。それに、私が村の外へ出られるはずがありません。……私の村はよくご存知ですよね」

質問ではなく、断定。カマかけすら必要としないほど明白である。王族と上級貴族に村の意味が分からぬはずがない。

なぜなら彼らは一度は必ず村人のお世話になるからだ。彼らは村人の力を必要とし、村人は彼らのためにだけ存在を赦されている。相互扶助、と言うにはあまりにも一方的な矢印で、この国のてっぺんは成り立っているのだ。

「言ったであろう。妾はなれの名より他は知らぬ」
「……殿下も、なかなかに頑なでいらっしゃる」
そしてしたたかだ。
「ふふん。妾は後宮に上がって二十年になる。こうでなくては二十年も保たぬよ」
そう答えた王妃の笑みには、年月に縁取られた確かな自信に彩られていた。
にわかに穏やかな時間が流れ始める。
王妃が手を打ち鳴らすと、待ちかまえていたかのように侍女たちが部屋へ入ってきた。次々と紅茶やらお茶うけやらをセットし直す。
「少しだけなら時間も許そう。今少し、妾の話し相手になってくれるか？」
（また、腹のさぐり合いでもする気か？）
王妃は口元を扇で隠して密やかに笑う。
「ふふ、かわゆいのぅ。なに、外の様子を聞きたいだけよ。腹のさぐり合いなどせぬわ」
イズミは面食らう。
やはり、したたかだ。内心嘆息しながら王妃に苦笑を返す。

「いたしましょう」

本来なら出会わぬ人と出会い、繋ぎができてゆく。
この繋ぎがどう転がってゆくのか……。

カップをソーサーに戻す音がした。

何かが、始まる音を聞いた。

3－14（後書き）

これにて三幕終了です。
ここまでお付き合いいただきありがとうございます。物語はまだまだ続きますのでこれからもよろしくお願いいたします。

第四幕：絡みあう糸４－１

「それじゃあ、行ってきます」

パタパタと慌ただしく階段を降りてきたイズミは、ラズに出立を告げる。

「イズミさん、今日も王城ですか？」

「はい。今夜、遅くとも明日あたりには産まれると思うんで、泊まりがけになるかも……」

「わ、いよいよですか。つい、十日前までは生きるか死ぬかの瀬戸際だったのに。スゴいですね。命って偉大ですね」

「はい。あ……。俺も居座っちゃってすみません、しかもかなりの格安で。早いとこ住処探します」

申し訳なさげに頭を掻いて言うと、ラズは慌てて否定する。

「いやいやいや！　そういうつもりじゃないですよ。ラム酒と子羊亭はいつでもイズミさんのために門を開きます！」

ポンと太鼓っ腹を叩く。

「ははっ。ありがとうございます。それじゃあ行ってきます」

「行ってらっしゃいませ」

ラズの笑顔に見送られ、イズミは駆け出した。

パタンと音を立てて閉じた扉を見て、ラズは微笑む。

「いやぁ～、青春だなぁ」

あごをなでさすって仕切りに頷いていると、タオルを抱えたミッチェルがやってきた。

「パパ！　サボってないでお仕事してくだしゃいっ」

「おとと……！　それじゃあルティとレヴィに藁をあげてこようかな」

「パパっ！」

詰所にいた兵士に挨拶をし、門をくぐる。

この十日でずいぶんこの城には慣れてしまった。とは言え、ベンガルのお産室と出入り口までの道程度ではあるが……。

「イズミ様」

「あれ、ジェンナーさん。部隊の方はいいんですか？」

お産室への道すがら、マリオンに出会う。

「ええ、一日くらい構いませんわ。あちらは副隊長たちに任せておりますから。それに……」

悪戯っぽい笑みを浮かべて言葉をつなぐ。

「ベンガルのことが気になって、職務が手につきませんの」

「ああ、分かります。情移っちゃいますよね」

「ええ。最近は特に。砂を入れてからはずいぶんおとなしくなりましたもの。そういえば、昨日イズミ様がお帰りになった後は、お腹を触らせて頂きましたのよ」

嬉しそうに語るマリオンは、高貴な出自に似合わず、かなりの動物好きと見た。それはこの十日間の付き合いで、充分承知していたし、家にペット用の妖魔を買っているという話も聞いた。

そうこうしているうちに、二人はお産室の前に着く。

マリオンは懐から鍵を取り出し、扉を開く。イズミもそれに続いた。

「ベンガル、おはよう」

4―2

砂の上に身体を伏せているベンガルの傍らに膝をつき、イズミは首筋をなでてやる。
心の奥底で繋がった影響か、はたまたイズミの動物に好かれやすい質のせいか、ベンガルはイズミに牙をむかない。

わしゃわしゃとなでられるままにしている。普通野生の妖魔はこんな風に触らせることはしない。ここに第三者がいたら驚きに卒倒しかねない。
ここまで気を許してくれたのも繋がったことにより、味方であることが分かったからだろう。

これがマリオンとなればベンガルはそう簡単には触らせない。と言うより、飼われているとは言え、危険種の妖魔が体を触らせてくれる方が破格だ。

しかしながら、ベンガルもマリオンが味方であることは理解している。そのため、ごくたまに触らせてあげているようだ。母性愛の為せるベンガルの優しさか。
研究テーマになりそうだ。

「あ、れ？」

なでている手を思わずとめた。耳をすますと、ベンガルの息づかいに苦しげなものが混じる。

「どうなさいましたの、イズミ様」

「陣痛が……始まったみたいです」
「えっ！？　ど、どうしましょう」

マリオンが慌てて聞く。

「とりあえず落ち着いて、前から準備していたお産セットを持ってきて下さい。まだ破水もしてないですし、大丈夫ですから」

「はい、分かりました」

頷き、マリオンは外へ出ていく。

まだベンガルの陣痛の間隔は広い。イズミは落ち着かせるように背をなで、力を使って話しかける。

《大丈夫、落ち着いて》

ベンガルは充分落ち着いている。むしろ、落ち着いてないのはイズミの方だ。

本来なら専門家を呼んで、子をとりあげてもらうのが一番良いのだが、ベンガルはイズミとマリオン以外の人間が入室するのを強く拒んだ。
当然と言えば当然なのだが、馬のお産に立ち会ったのが精々のイズミにはヒヤヒヤものだ。

《ん……？》

不安を隠しきれてなかったのか、ベンガルが心を通して触れてくる。
その触れ方は優しく「大丈夫だよ」と気遣うようであった。

目を細めてベンガルを見ていると、扉が開く。乙女はタライの中にタオルやらハサミやらを入れ、イズミの横に腰を下ろした。

「お湯の準備はまだよろしいですか？」

「まだ、大丈夫です」

イズミはベンガルの腹を優しくなでる。

《何をすれば良い？　何か欲しいものは？》

ベンガルからの返答は、今のままで。ということだった。だから、望み通りに腹をなで続ける。しばらくなで続けていると、ベンガルの陣痛の間隔も短くなってきたのが分かる。

いよいよだ。

4―3

ベンガルはおもむろに立ち上がり、小さく身を振る。すると勢いよく羊水が流れ出た。羊水はベンガルの周辺の砂に吸い込んでゆき、砂は重く濡れている。

「破水したっ。ジェンナーさん、産湯の用意」

「はいっ」

返事をすると、それまで横で心配そうに見つめていたマリオンがタライを抱えて部屋の外へ出て行く。

マリオンの姿が見えなくなった途端、イズミは息を吐き出し、荒い呼吸を繰り返す。

意識が力で繋げられたままのため、痛みも伝わってくるのだ。マリオンには知られたくなかったため、必死にこらえていた。

「……っふ！」

せめてもの救いは、深層ではなく、表面で繋がっているため、痛みが緩和されているという点だろうか。実際は、これ以上の痛みが子を産む時にかかる。子を産む存在はかくも強い。

《もうちょっと、もうちょっとだよ。足が見えてきてるから》

痛みをこらえてベンガルの背をなでる。母ベンガルは返事に費やす気力はないのか、ひたすら堪えている。

「イズミ様、お湯持ってきましたわ」

マリオンが入室した瞬間、イズミは息を整え姿勢を正す。
脂汗が出るのは止められない。せめてこの汗が、動いて出た汗だと思ってくれるといいのだが。

もうどれほどの時間が経っただろうか。時計もなく、外の景色を見ている余裕もないため、時間間隔というものはどっかに消え去ってしまった。

ベンガルは逆産のうえ、ひどく難産だった。なかなか頭が見えてこないのだ。

「時間をかけすぎてます。このままでは母ベンガルの体力が保たない……！」

切羽詰まった物言いをするイズミに、マリオンはうろたえたように聞く。

「どうすれば」
「子どもの後ろ脚を引っ張ってお産を手伝います」

同じことをベンガルに伝え、子ベンガルの脚に手をかける。

「ジェンナーさんは少し離れていて下さい」

言うなり、思いっきり引っ張る。

「せーのっ、〜〜〜っ！！」

母ベンガルは必死に砂の上で踏ん張る。引っかかっていた脚がズルリと抜けた。

「せーのっ！」

引っ張る。

胴まで見えてきた。

「あと少しっ、頑張って下さい」

遠巻きにマリオンの応援している姿が目の端に映った。

「せーのっ……！」

その瞬間、ズルリと子の頭が出てきた。母ベンガルの息は荒い。ズキズキと痛む頭を抱え、イズミはマリオンに仕事の指示を出す。

「ジェンナーさん、子どもの体を産湯で清めてやって下さい。俺は後産の処理をしますから」

驚いたことに、胎盤や臍の緒といった血の匂いがするものは、ベンガルがすぐさま砂の中へ埋めてしまった。

野生の習性だろう。補食者だろうと、不用意に血の匂いを撒き散らしているわけにはいかない。

その証拠に、産まれたての子ベンガルは黙したまま、産声ひとつ上げずに立ち上がろうとしている。

ひと通り済み、ベンガルは腰を落ち着ける。意外なことに、マリオンが我が子の手が届く位置に居ても威嚇したりはしていなかった。さすがに触れたら怒るだろうが、マリオンでも近づくことは許されたらしい。我が子を守る本能よりも、危険はないという理性を優先出来るあたり、ベンガルの知能が高いことが分かる。

（あれ？　これって何気に表彰ものの発見じゃ……？）

「イズミ様ー。この子、男の子みたいですわ」

視線に気づいたのか、振り向いてにっこりと笑う。イズミはその笑みに応える余裕はなかったが、持てる限りの力を使って表情筋を動かす。

そして傍らで自らの体を舐めているベンガルの背に手を置いた。

《お疲れ様。元気な男の子みたいだね。よかった》

そっと話しかけると、イズミと視線を合わせ、静かに首をもたげる。ベンガルからの思念は「ありがとう」だった。

4―4

お産室の裏手にある井戸。
マリオンが一声掛ければ湯殿を借りることは容易いが、今湯船につかれば確実に眠ってしまうだろう。かと言って汗まみれのボロボロの格好で宿に戻る気もしない。

マリオンの話によれば、この井戸にはいろいろといわく付きらしい。昔、城の兵士が惨殺され呻き続けているだとか、ふられた女官が身投げした井戸で、すすり泣きがきこえる。
おそらく井戸の位置が、手入れされていないうっそうと生い茂った藪の中にあるのが原因だろう。
たしかに、葉がこすれあう音が人の声に聞こえなくもない。

藪が月明かりに照らし出されている。月に照らされた葉は陰影をよりくっきりと浮かび上がらせ、何とも言い難い不気味さを醸し出している。もっとも不気味だろうが何だろうが、金髪が見られる心配がなければイズミは構わない。

服を手早く脱いでゆき、桶に移した水を頭からかぶる。

コルカの実で染めた赤茶けた髪が、もとの金髪に戻っていく。二度、三度とかけていくと、汚れも染料もすっかり落ちた。同時にそれまでイズミを苛んでいた頭痛も治まってしまった。

作業用の汚れた服を水で洗い、固く絞るとそれで体を拭く。下着とズボンを身につけ、上着の水を絞って水分を飛ばすように思い切りはたいた。

淡々と身を清める身を清める作業を続けていると、藪がガサガサと音を立て揺れる。

「おおい、誰かいるのか？」

藪の奥から聞こえた誰何（すいか）の声に思わず肩を震わせた。声の主がこちらに来る気配を感じ、慌ててたった今洗ったばかりの上着を急いで頭に被る。

藪越しに顔を出したのは騎士姿の若い男だ。十メートルほどの距離を保って騎士は話しかける。

「何者だ。この城の下働きか。そこで何をしている」

「いえ、下働きじゃなくて助産夫です」

言ってからマズイと思った。

いくら若くても相手は騎士だ。貴族や騎士は一概に皆、無駄にプライドが高く庶民から馴れ馴れしい口調で話されるのを嫌う。騎士の権限に「抵抗および拘束時粛清」などというのがあるが、文字通り抵抗を示す者を切り捨てても咎められないという規則だ。状況は悪いことに騎士とイズミしかいない。下手をすれば切り捨てられてもおかしくはない。偉い人曰く、死人に口はないのだ。

（なんだか最近気がゆるんでるなぁ）

叱責を覚悟するが、内心焦っているイズミにかけられたのは質問の続きだった。

「助産師が何故かような人気の無い場所にいる」

幸いにもまだ年若いこの騎士は数少ない例外だったようだ。それとも不審者の身元を明らかにする方が先と判断したのかは知らないが、騎士は二、三歩とゆっくりとこちらに近づいてきた。
なぜか相手の騎士は息を呑んだ。

「お前……いいえ。あなた様は」

急に口調を改めた騎士の視線が自分の胸元にあるのを見て、胸元に揺れる誓いの証の存在を思い出した。
しまわずに服の外に出していたことを。

イズミの首飾りは天馬を象ったもの。騎士であればそのペンダントを受けるのが何よりの名誉だ。なぜなら天馬は王家真祖の証だから。

「……」

（本当に有り得ないっ。気が緩むにもほどがあるだろう自分っ！）

4―5

一瞬にして頭が真っ白になる。そして数瞬後には様々な思考が頭の中を駆け巡る。尋問、拷問、投獄……。脳内では何パターンもの予測が立つが、そのどれもがイズミには嬉しくない予測ばかりであった。

（あぁぁ～……　やっちゃったよ。俺がこれ持ってちゃまずいでしょうが）

王家真祖に連なるものの証だ。
ただの王族だったら天馬ではなく竜の馬といわれる青馬。
天馬のペンダントを着けられるのは今のこの国には二人しかいないはずだ。一人は現国王。そしてもう一人は先日会ったばかりの王妃。
青馬の紋様だったらともかく、天馬では確実に怪しまれる。

「おい、シェラティム。どうした」

天の助けとは言い難いが、硬直した二人の空気を引き裂くように声が割って入る。対峙していたシェラティムと呼ばれた青年騎士は振り向き応える。
二つの人影がやってくるのが見えた。

「将軍、あの……こちらに」

（しょ、将軍っ！？）

暗がりにいるせいでいまいち顔が判然としないが、シェラティムの

言が確かならどちらかは軍の幹部である。騎士ならともかく、将軍自ら巡回をしていた訳ではあるまい。場所が場所なだけに、こんな所で権力者と出会ってしまった不運を思わず呪った。
何にせよこの場からの逃亡はますます困難を極めるに違いない。

「は……っ！」
「あっ」

将軍とイズミは同時に驚愕の声をあげた。ポカンと口を開けたその顔に、イズミは激しく既視感を覚えた。

「貴様、あの時の賊っ！？」

「ちょっ、賊って失礼な。アンタたちがうちの連れを勝手に勘違いして捕まえたんじゃないですか！」

正しい。限りなくイズミの訴えは正しい。しかし別れ方がいただけなかった。不可抗力とは言え、ムリに逃げてきたのだから賊扱いされるのも仕方はない。

憤慨しながらも油断なく視線だけを巡らす。今は頼りになるルティオンもレヴォルトもいない。期待できるのはマリオンだが、今はまだ子ベンガルの世話に忙しいはずだ。

将軍の後ろに立つ青年に目をやると確かに見覚えがあった。
不還の森でやはり将軍の側に控えていた騎士である。思い返せばシェラティムの顔も見覚えがある。

「貴様、何者だ」

相手も警戒しているらしい。一定の距離を保ったまま動こうとしない。加えて右手は剣の柄に触れている。警戒の度合いが伺えるというものだ。

「ただの助産夫ですよ。さっきもベンガルの子をとりあげてきたばっかりです」

とりあえず敵意がないことは示さなければならない。

「助産夫？　何が目的だ」

「あの、将軍。それがこの方は……っ」

訝しむ将軍にシェラティムが口を挟む。

「いえ、そんなはずはないんですが。でも、あのっもしかしたら……噂が……」

もごもごと言いよどむシェラティムに将軍はしびれをきらす。

「シェラ、なにが言いたい。はっきり言え」

「はっ。僭越ながら上申いたします。こちらの方の胸元にあるのは、上位貴族以上の方がお持ちする誓いの証にございます」

本当なのか、と将軍とその傍らに立つ騎士はイズミの方を向く。

いまだ不審者の疑いは晴れていないものの、全く信じていないわけでもないようだ。いや、万が一にも王家に連なる上位貴族であった場合首が飛びかねないからだ。それも物理的に。

それを証拠に、イズミの胸元を確認した将軍の視線と口調に柔らかさが出る。

「失礼ですがお名前をお聞かせ願いましてもよろしいでしょうか」

「……」

「将軍それが、こちらの方の誓いの証は――」

頑なに口を閉ざすイズミを見兼ねてか、シェラティムが口を挟む。

不敬罪で切り捨てられないよう、せいぜい偽証罪での投獄を祈る。

「――天馬なんです」

シェラティムの告白に、将軍と騎士はこれ以上ないくらい目をむいた。

4―6

万が一にも無礼があってはならないとでも思ったのか、いち早く正気に戻ったのは将軍その人であった。片膝を地に付けて頭(こうべ)を垂れれば、後ろに控えていた騎士二人も素早くそれに倣う。

「失礼を承知でお聞きして宜しいでしょうか、尊きお方」

貴人に対する礼を示す。

「どうぞ」

「あなた様はトリア様ではございませんか？」

自分でも荒唐無稽な話をしている自覚はあるのか、目の奥に苦々しさが見てとれた。

「なぜそこに行き着いたのか分からないでもないけどね」

イズミはひとりごちて深々と息を吐き出す。

「それにしたって私がトリア様だなんて冗談にも程がある。お立ち下さい騎士様方」

起立を促す。それに従い、首を捻りながらも三人は立ち上がった。

「誤解を先に解かせてもらいますけど、これは旅の道中お会いした方から預かったものです。サミラ＝シ・ナのある方にお渡しするよう承っただけです」

「王家真祖に連なるお方ではないと……？」

「一般人ですから」

「貴方の青眼は市井（しせい）では有り得ぬもの。その頭の覆いも金髪を隠す為のものではないのですか」

イズミは口をつぐむ。否定したところで彼らの考えが揺らぐことも無さそうだ。

しかしここで自分の正体を明かす気はさらさら無かった。確かにイズミはこの眼前の生真面目な将軍を気に入っていたし、目的を果たす為の同志として欲しいとも思っていた。しかし、それでも思うのだ。

（今はまだ時期じゃない）

ハンコックに明かしたのだって打算あってのことだ。物事には時勢というものがある。これを欠いては歴代の英雄とて生き残ることは叶わなかっただろう。だからイズミは時が来るまで事実を明かすつもりはなかった。

と言っても抵抗および拘束時粛清権限を持ち出されては敵わない。それにお産を終えたばかりのベンガル親子も心配だ。早々に部屋に戻りたい。

「分かりました。では幾つか質問をお許しいただけますか」

諦めた訳ではあるまいが、このままでは埒があかないと思ったのだ

ろう。にらみ合いをやめて建設的な質問に移る。

「どうぞ」

「その証を預かったと仰いましたがどのような方から預かったのですか？」

「名前は聞いてません。男性で年は……三十後半くらいだった気がします。もう十年も前のことなのであやふやですが」

特に隠すようなことでもないのでイズミは素直に答えた。

これは嘘ではなかった。イズミは確かに真祖に連なる血筋の生まれだが、正統な血筋ではない。そのため誓いの証を手に入れることは叶わない筈だったのだ。村に一人の旅人がやって来るまでは――…。

4―7：回想1

青く晴れ渡った空はイズミの瞳と似て非なるものだった。だからかもしれない。イズミは空の青さがひどく憎らしくて嫌いだった。

「イズミさま、どちらにおいでですか。イズミさまー！」

自分を捜す声が意外なほど近くからしたことに驚く。ボーっと空を見上げている場合ではない。

イズミはすぐさま小さな身体を丸めて、良く手入れされた生け垣の下に潜り込んだ。

去年までは余裕で通れた生け垣の隙間も、十歳になった今ではギリギリになってきた。

恐らく来年にはもう通れなくなってるだろう。そう思うとやるせなく、自分は家を抜け出してまで何をしていたのだろうと情けないような怒りたいような不思議な気分になる。

生け垣を抜けると何もない道に出た。家が密集している方角とは別の方へ出てきたため人の往来も見られない。

とりあえず行くあてもなく人の居なさそうな方へと歩いていく。普段邸から出ることなく、外出の折にも護衛を連れ歩くような生活だ。道を知っているわけもないし、増してや隠れる宛などある筈もない。

山あいの小さな村のため、子どもの足では不用意に村を出ることも出来ない。

出来ることと言えばせいぜいこうして村人たちをやり過ごし、捜索

隊を出させて様々な人に迷惑をかけるだけだ。

「しっかりしろよ俺！」

バチンと両頬を叩いて気合を入れる。

（迷惑だろうが何だろうが、俺には考える時間が必要なんだ）

そのためには勉強や習い事ばかりの邸ではダメだ。それにはとりあえず……。

「ここ、どこ？」

「なんじゃ坊。迷子か」

背後から掛けられた男の声に硬直する。

ギギギと音がしそうな動きで振り向けば、そこにはクマのような大男が立っていた。

「ここは村の外れじゃ……と言うか山ん中だな。わしも迷ってしもうた」

大男が恥ずかしそうに頬を掻く姿は妙な愛らしさがあった。

村から出たことはないが、知識から男の訛りが北方のものだと分かる。

イズミの住む村は一種の隠れ里だ。目的あって進まない限り、迷った程度では辿り着くことはできない。となれば、わざわざ北方から地図の南に位置するこの村に来た理由が分からない。　分からない以上人の良さそうな顔をしているからと言って警戒を解くことはしない。

「坊は村のモンか？」

質問に答えるべきか逡巡する。

「村のモンだな。そのキラっキラした金髪に青眼はうちの国の真祖の特徴じゃ。ってぇことは坊領主の息子か」

バッと音がしそうなほど飛び退る。

わずかに腰を落とし構えるのは戦闘に備えてではない。たかだか十歳のイズミがどうしたらこの二メートル近い大男を倒せるだろう。そんなイチかバチかの賭けをするほどイズミは馬鹿でもないし、自棄にもなっていない。

ただ緩く腰を落としているのは正体不明の男から逃げるためだ。村の存在は国家機密。ただし村自体の存在は厳密に隠されているわけではない。特にその存在の意味から貴族や王族たちには知らされている村だ。一種公然の秘密と呼べなくもない。

問題とされるのはその村に連なる村人たちの有用性。全員がわずかなりとも貴族や王族の血をひいているのだ。特にその中でも真祖の血を色濃くひいているイズミたち領主一家はそれだけに能力が貴重なものばかりだ。

ストック要因の中でも取り換えが効く一般の村人と違い、領主一家の能力はストックの中でも有用性が高い。そのことを眼前の男が知っていたとしたら、それを目的でこの村に訪れたとしたら……。

最悪捕まった時の対処方法は自らの死だ。

4―8：回想2

溜めを作ったまま、目線だけをスッと横にずらす。イズミの目線に合わせ男も訝しげに顔を巡らした。

その瞬間を見逃さず、脱兎のごとく道から外れた藪の中に身を投じる……否、投じようとした。イズミの逃亡は襟首を掴まれたことでかなわなかった。

これ以上ないくらいの素早さで走り出した自信はある。しかし男はその巨体に似合わないスピードでイズミとの差を詰め、瞬時にその逃亡を止めたのである。視線を逸らされていたにも関わらずだ。

この一連の動きだけで分かる、この男は強い。幼いイズミにさえ分かってしまったのだ。それほどまでに圧倒的な実力差。

もはや逃亡はかなわないと諦め、ならばと舌を噛み切ろうと口を大きく開けた。

舌を挟もうと勢い付け両の歯を打ち鳴らす。

「？？だぁっ！」

舌を切る痛みは感じなかった。代わりに口の中には手が、頭上からは大男の呻き声が降ってきた。

「っ～……。坊、なんてぇことするんじゃ」

「……」

口の中に手を突っ込まれ、拘束されたまま見下ろされるのは良い気分とは言い難かった。もっとも悠長に我が儘を言っていられる状況ではないのだが。

男のイズミを見下ろす眼は驚くほどに冷たい。その眼光に射すくめられたようにイズミは男の腕の中で硬直する。

「人間は舌を切ったくらいじゃ死にゃあせん。ひたすら悶え苦しむだけじゃ」

尚も冷たい眼差しはイズミの身体を貫く。人の死などとうに見飽きた眼だ。必要とあれば命を切り捨てる選択を出来る上に立つ者の持つ眼だった。

（俺は、知っている。だけどそれを何処で知った……？）

その冷徹な眼に状況も忘れて既視感を抱く。

「坊、死にたいんか？」

頭の端に引っ掛かるものを外せないまま意識を戻される。

突っ込まれていた男の手が口から離れていく。片手で押さえつけられたまま離れた方の手が首筋へと移動した。その手の感触と共に、唾液のぬるりとした感触がやけにはっきり意識されて気持ち悪い。

そのまま指に力を入れれば頸動脈を圧迫して死に至らしめる絶好の位置。しかしそれ以上に男の大きな手であれば、子どもの細首を折ることなど容易いだろう。

生殺与奪の権は男にある。

「坊、死にたいんか？」
「ぁ……う」
自由になった口とは裏腹に、繰り返される質問にイズミは答えられないでいた。
再び舌を噛み切ることも出来ないまま、じっとりと汗が額を濡らす。

4－8：回想2（後書き）

ここまで読んで下さった方々ありがとうございます。
お気に入り登録して下さった方々には心の底から感謝申し上げます。
この画面から溢れ出んばかりの感謝の念ですが、残念なことに現実では溢れていないそうです（↑当然）
いずれまた感謝の気持ちを込めて番外編か、更新増とかさせていただくつもりにございますのでよろしくどうぞ！

また、随時感想・評価などお待ちしておりますので「えいっ」と気軽な気持ちでひとつ、お願いいたします。
それでは、まだ不定期更新は続きますが、どうぞお付き合い下さいませ。

追記：お時間のある方はユーザーページから活動報告もご覧いただければ幸いです。そちらの方には「空の玉座」の裏話やそれ以外の突発的な短編が載せてあったりしますのでぜひ。

4―9：回想3

？

死にたいなら殺してやる。そう言わんばかりにジワジワと首を締める手に力が込められていくのが分かる。

「――っ死にたい、わけがない」

村では命は余りにも容易く奪われる。村人たちの大半は特殊な力があるが故に道具同然に使われたり、時には貴族や王族の身代わりとして果てる運命にあるのだ。そんな状況で生きてきたイズミは、命の灯火はか細く儚げに揺れるものであることを知っていた。

だからこそより一層強く思い、願う――。

「死にたくないっ！」

「ほうか、ならええんじゃ」

「……は？」

あっさりと自由になった身体で男に向き合う。大男は慈しむような笑みを浮かべてイズミを見つめていた。

「怖がらせて悪かったのう坊。命の使い方なんぞ人それぞれだからとやかく言う気は無かったんじゃが、坊が簡単に舌噛み切ろうとするから」

乱暴な手つきでイズミの金髪をかき回すその感触がこそばゆい。

「別に死のうとしたワケじゃない。舌噛み千切ったくらいじゃ死ね

ないの知ってたし。ただ情報漏洩を防ぐために舌切ろうとしただけ」

とは言え迅速な処置が無ければ死ぬのは当然だ。しかしこれは村人全員が教え込まれる対処法である。捕まって拷問された時に漏洩しないように、敵に敵わないと思ったら迷わず舌を噛み切れと。

言うは安いが大人でも実行出来る者は多くないだろう。増してやイズミはまだ十歳。それを躊躇わなかったのは領主の後継という立場がさせたものか。

平然と、むしろ実行に移すことを防いだ男を恨むように睨んだイズミを、苦々しげな面持ちで見返す。

「ねぇおじさんは何者？」

「たっ、旅人じゃよ」

「そんなあからさまにどもられても。じゃあ名前」

「名前、名前な。おー、あー……ジャック？」

「なんで疑問形」

明らかに偽名ですと全面主張している男をしり目にイズミは嘆息した。

そっと男の様子を伺えば、麻布で織られた簡素な服に機動性を重視して左胸だけ隠された革の鎧を纏っている。唯一の持ち物も、腰に提げている重騎士が使うような大剣ぐらいだが、所属を示す紋様もない。要するに身元不明の不審者。

亜麻色の髪にはしばみ色の眼は市井に珍しくないし、訛りから北方の生まれであるくらいは分かるが、それ以上の身元は本人に聞くしか手はなさそうだ。

もっとも偽名を名乗っているあたりそれを明かす気がないのは明白であるが。
厄介そうな珍客の目的だけでも聞き出せたらと思うのだが、力では敵わないことは先刻証明済みだ。

それどころか自傷も止められたことから、この身が村に対する格好の身代になる。それは最悪王国相手に対等な立場で交渉できる切り札を与えたことにも等しい。

いや、王国ならこの村を証拠隠滅のために男ごと焼き払うくらいのことはするかもしれない。どうせ道具たる私生児や忌児は年々産みだされるのだから。

イズミはここにきてやっと考えもなしに村を飛び出した自分の浅はかさを呪った。

4－10：回想4

？

「ジャックは村に用があって来たの？」

聞きながらもそれ以外にこんな隠れ里があるような辺境の地に来た理由はないだろうと確信していた。

「まぁ、そうじゃな。というか落ち逃れて来たようなもんじゃが」

「落ち逃れて？」

ぽつりと漏らした言葉にジャックは口を滑らせた、と小さくつぶやいた。

「……坊は村の領主の息子じゃな」

「今更隠しだてしたところで意味は、無いみたいだね」

ジャックの確信しきっている目にイズミは息を吐いた。

「イズミです。あなたの身のためにファミリーネームは名乗りません」

領主の息子という立場での対応はとれないと言外に述べているのだ。名前に責任が取れない以上、今の立場ではあまり意味が無いが便宜上イズミはいち個人として交渉するしかない。

もっとも本当に言うだけというか名目のため、更に言うならば言質を取られないようにする程度のためでしかないのだが。

そのためにもわざとイズミは「ジャックの身のため」と銘打ったのだ。

しかしながらいち個人としては誠意ある対応を取るつもりだ。
それでも人質に取られてしまったらまったくもって意味を成さない。
だから今からのイズミの対応が問題となるのだ。

窮屈でも自分の生まれた村だ。多少の愛着はある。
そして何よりも愛する妹と大事な親友のために村を危機に晒すことはできない。ジャックを――ひいては王国を敵に回すことのないようにうまく立ち回らなければならない。

「ふっ」
息を漏らすようにジャックは小さく笑った。

「坊は賢いのぅ」

その穏やかな目がやはり居心地悪く感じられ、イズミは視線をさまよわせる。

何なのだろうかこの視線は。イズミを見ているようでその実イズミを通して別の誰かを慈しんでいるような目。
いくら自分越しとは言え、そんな目で見られたことの無いイズミには気恥ずかしいもの以外の何物でもない。

「坊、今この国で起こっていることをどれくらい知っている？」

ふと真剣な表情に戻してジャックは聞いた。

「宰相の死、愛妾の死、急進派への権力の移行」

つらつらと挙げてられていく情報は領主に聞かされていた情報である。

今宮中は荒れに荒れている。いつ要請があるとも知れない状況に情報のやり取りだけは毎日のように欠かさない。

「それだけ知ってりゃ充分じゃ」

「それと、これはまだ確実な情報ではありませんが――」

「ん？」

「トリア様がお隠れになったとか」

ジャックは静かに目を見開き、イズミを凝視した。

独自の情報源から手に入れた情報。父親だけか恐らく宮中でも知っているものは限られているほど第一級の重要機密であることは確かだ。

果たしてジャックの知っている情報であろうか。

「……なるほど、どうやらパイプを繋ぐのは親より子の方が長けていると見た」

「お褒めに与り光栄です」

慇懃無礼に口元を歪ませて頭を下げれば、ジャックは頬を引きつらせる。

「ちょいと坊、かしこすぎやせんか」

「それも褒め言葉として受け取らせていただきます。それで、ジャ

ック殿のお話しはそのトリア様についてで相違ありませんね」
「はぁ、舐めてかかると痛い目にあいそうじゃ……」
大方子どもだと思ってこちらの情報を絞り取ろうとしていたのだろう。人の良さそうな顔をしてやることはやるということか。あの冷たい目といい、人を見た目で判断してはいけない良い例である。
もっともそれを分かっていて交渉に及ぶ程イズミは甘くない。
同じ土俵に立てないなら別の土俵に立たせてやればいい、一方的な力関係など覆してやる。幸いにしてジャックの様子からイズミの情報に注意を払わせることだけはできたようだ。
「話は長くなる。その前にこれをイズミに渡しておこう」
そう言って胸元から取り出したのは――。
「っ！　これは、天馬の誓いの証」
「これは今からお前のモンじゃ。だが、然るべき相手を見つけたら渡してくれ」
今現在これを所有しているのは国王陛下と王子殿下のトリア様のみ。なぜこれをこの男が持っているのか。
「よく聞くんじゃ、イズミ」
厳しい目でイズミを見下ろす。
「トリア様は死んだ」
「――っ！」

4―11

都合の悪いところは伏せつつ矛盾のないよう説明をすれば、難しい顔をした隊長が顔を上げる。

「……つまり貴方は辺境の村の生まれで、その証は偶々村に立ち寄った旅人がもうサミラ＝シ・ナには戻れないからと貴方に預けたものなんですね」

しまった。都合の悪いところを伏せたら真実とは全くの別物になってしまったではないか。

その上要約された内容は詳しく語る前となんら変わりはない。いや、変わりがあったら困るのは確かなのだが。

釈然としないものを抱えつつ、イズミは粛々と首肯した。

「はい」

「ふむ。では髪と眼は先祖返りか……」

どう思う、と振り向いて二人の部下に意見を求める。

シェラティムと呼ばれていたそばかすの騎士が視線だけを隣に立つ貴族顔の騎士に向けた。

それが何かの合図なのか、それとも単なる発言権の譲渡なのかはイズミには判断が出来ない。

貴族顔の騎士は微かに頷いて「私見ですが」と口を開いた。
「恐らくその旅人は十年前の宮中の権力争いに敗れた旧宰相派でしょう。宰相派はトリア様を国王にと持ち上げる者が多かったように記憶しております」
「ではトリア様の証を持っていた理由は」
これもあくまで私見になりますが、と前置く。
「いくつか思い当たりますが、一つはその証が偽物であるという可能性です。その意図も想像するしかありませんが」
言いよどむ彼を将軍は促さずにただ見ている。
その視線を受けて騎士は視線を右上に上げて、スっと左下に彷徨わせた。
「トリア様がご存命なのでは」
あり得てはいけない可能性を口にしたのは、横に並んでいたそばかすの騎士だった。
貴族顔の騎士はあからさまにホッとした表情を見せる。
立場上、王の膝元で口に出来る内容ではないからだろう。それに比べ貴族ではないのか、はたまた本来が奔放な性格なのか、彼は驚くほど平然と可能性を口にした。
部下の言葉を咎めることもせず、将軍は小さく首を振った。

「いずれにせよ可能性の一つでしかないな」
「あの……」
「ん？」

おずおずと切り出せば将軍はこちらを向いた。

「王都に行って然るべき方に渡して欲しいと言われただけで、誰とは聞いていないので。これ以上お話し出来ることはありません」

一刻も早くこの場から立ち去りたいイズミだ。

騎士三人、しかもそのうちの一人は若き才能の将軍である。普段であれば式典で遠くから見るのがせいぜいという立場の相手だ。
そんな殿上人を目の前に、なんと際どい会話をしていることか。

「それに、ベンガルの子を診なければならないのでそろそろよろしいでしょうか」

頼むからこれ以上のボロを出さないうちに帰らせてくれと心の中で念じながらベンガルを理由に帰宅を望む。

彼らにとってイズミは不審者に違いないが、それ以上に王の保護している妖魔の世話を頼まれた者なのである。

国の保護下であり、王の私物を与る者を疑うことは王に対して疑念を抱くに等しい。
その保護がたとえ名目上のことであろうと勅命でなかろうと、それは王に信頼を置かれた者という名目が立ってしまうからだ。

そして、その理由から法的に拘束はされなくとも将軍は忠義を示すために「ベンガルのため」と銘打つイズミを解放せざるを得ない。

？

4―12

失礼がないように腰を折った後、踵を翻せばその背中に声がかけられた。

「君、名前を教えてくれないか」

「……イズミです。姓は持ちません」

振り返れば真っ直ぐな瞳がイズミを捉えていた。

「私はディアンガル・ウィグノ。国王軍近衛騎士隊の東方将軍を勤めている。この二人は補佐の――」

「アーシュ・ライヒ・フィークスと申します」

「シェラティム・リーです」

貴族顔の青年騎士とどこかあか抜けない騎士がそれぞれ将軍に倣う。なるほど、貴族顔の方はまんま貴族だったか。

しかしイズミはなぜ自己紹介などされたのか理解できず、頭を下げるにとどめた。

「聞きたいのだが、イズミは助産夫の仕事で生計を立てているのか？」

「いえ、その人探しの途中で受けた仕事です」

「ではもうその仕事も終わるのだろうか」

「ああ、はい。そうなりますね。まだ一カ月くらいは経過を見なけ

ればならないでしょうけど、それもそう忙しくないですし。新しい仕事探さなくてはなりませんね」

事前に貰っていた報酬だけでも優に一年以上豪遊して暮らせる額である。

イズミに成さねばならぬことがある以上王都から離れることは出来ないので正直今回の報酬はかなりありがたかった。

更に言えば、ベンガルを野生に返した後は城勤めの仕事を手配して貰おうと考えていたイズミである。しかしそれがディアンガル将軍に何か関係するのだろうか。

「そうか……。東方部の宿舎は知っているか」

東方、西方、南方、北方の四隊は城の中でも王の住まう棟を中心に、その名の通り四方の護りを固めるように宿舎が立ち並んでいる。

詰め所も宿舎の直ぐ傍らにあるため、有事の際の護りは万全であることに定評のある隊である。

その知名度は城下だけでなく、国土全土に誇る。

「はい、一応場所は」

「良い。ではそこで働く気はないか」

……は？

どんな聞き間違いをしたのかと、イズミは頭の中で今の会話を再生させる。

しかし何度再生したところで同じ言葉が繰り返されるだけだ。どうやらイズミの耳は正常らしい。

「その証を渡す相手は王城にいる可能性が高いだろう。君としてもその方が良いのではないか」

確かにそうには違いない、むしろ降ってわいた幸運だ。

しかしどういうことなのか。

「私を、警戒しているんですね」

ピクリとディアンガル将軍の右眉が微かに動く。

「私の話とこの証の真偽がどうであれ、放置しては王に災厄が降りかかるのではないかと危惧している」

ディアンガル将軍の後ろでアーシュが眉をひそめ、シェラティムが八重歯をむき出しにして警戒を露わにした。

そんな二人のことが見えているかのようにスッと手を挙げて制すれば、ディアンガルは静かに頷いた。

「そうだな。たしかに警戒も危惧もしている。だが、私はそれ以上に期待しているんだ」

期待とはまたおかしな話である。

「今更だがこれ以上はこのような場所でする話でもあるまい。今の話も含めて、ぜひ宿舎に来るといい。下働きでよければ雇おう」

「……分かりました。考えておきます」

「うむ。話は通しておくから、東方宿舎に寄ったら誰でもいい、暇そうな者を捕まえて私の名前を出すと良い」

「ありがとうございます。それでは」

一礼し、今度こそイズミは古井戸を離れてお産室へと戻る道を進む。

イズミが角を曲がるまで、その背中に感じる視線は無くなることはなかった。

４―１２（後書き）

これで四幕は完結です！
ここまでお付き合いいただきありがとうございました。
四幕まできて話の進行度は４０％といった感じです。これからまだまだ続くのですが、実は話のストックがとうとう切れてしまったので、しばらく更新が止まります。
お付き合いいただいてる方々には本当に申し訳ありません（汗

雨木　拝

5―1：それぞれの思惑

？《自縄自縛の王妃》

王妃がパサリと机の上に投げ出した書簡を軽くよけて、女官はその隣に花茶を差し出した。

「のぅ、クゥナ」

「はい」

「その書簡いかがしたと思う」

主の文脈のない問いは今に始まったことではない。これを上手に返してこそ正妃付きの一流の侍女である。

「この国に横恋慕する方からの密書にございましょうか」

顔色一つ変えずに言ってのけるクゥナは、続く王妃の氷のような笑みに小さく頬を引きつらせた。氷の女王（アイシークイーン）の名に相応しいその笑みは、必ずと言っていいほどクゥナを始め周囲に多大な影響――時には被害を及ぼす前兆なのだ。

それを承知でどうして平生でいられようか。

「殿下」

それでも表面上だけは冷静を保って王妃を咎める。

「大事ない。それよりもクゥナ、気にならぬか。なぜ今になってこのような密書が妾のもとに届いたのか」

「それは……」
「良い。この場には妾とそち以外誰もおらぬよ。ざっくばらんな態度で宜しい」
敬愛する上司にあけすけな意見を求められて口をつぐむ理由はない。クゥナは小さく一礼し意見する。
「陛下の多岐に渡る遠征に端を発しているのではないかと愚察いたします。
今のこの国は兵力が分散され、民も疲弊しきっております。それでも尚、立ち行くのは肥沃な大地と恵まれた気候、立地に他ありません。
この状況で穏やかに求婚という形を取るのは至極当然のことと思われます」
「ふむ、当然じゃな。しかし、それならば十年前のトリアを巡る騒動の時でもよかろう。なぜ、今なのだ」
和平交渉をするのであれば確かに今よりも、武力行使に移しておらず、混乱に乗じた当時の方が無難に思える。それをこの時期にしかも王妃に打診してきている。
本当の目的はどこにあるのか。
見誤ればこの国はいとも容易く乗っ取られるだろう。それを避けるために、最後の砦となるべく王妃は王妃としてこの国に君臨しているのだ。
「今、何かあるのか？」

考え得るはやはりトリア王子の存命説か……。
しかし信憑性にいまいち欠ける噂程度で他国からの干渉を受けるだろうか。その上、王妃という立場の彼女に充てたものであれば尚更公文書に違い和平交渉と言えるのである。

何か裏がある……。王妃は直感でそう感じた。

「どちらにせよ女の妾が介入できる所は限られておる」

そう言って王妃はついと口の端を上げた。

「精々足掻いてもらおうではないか、村の忌児に」

5―2

《反抗期のレジスタンス》

とある酒場の地下には二十人程が収容できる空間があった。
椅子代わりの酒樽が二、三ある以外は何もないそこは今は十名程が集まっており、それなりの狭さを誇っていた。

「ハンク……そろそろ我々も動いて良い時期ではないのか」

無精髭を生やしたままの中年男が口火を切る。
ハンクと呼ばれた青年はもちろん、あの『ラム酒と子羊亭の息子、ハンコック』であった。

「国王軍近衛隊の要人にも同意者が出た。機は今ではないのか」

強い口調で続けたのはハンコックとそう年の変わらない二十代半ばの青年だった。
方々から驚嘆の声が上がる。それだけ国王軍近衛隊の影響力は強いのだ。王に忠実な騎士の、その上要人が反旗を翻すことに同意を示しているというのはそれだけで心強い。

「ハンク」
「リーダー」
「決断を」

口々に叫ぶ男たちを片手を挙げたのみで鎮めれば、ハンコックの統率力の高さが伺える。

そうしてゆっくりと口を開いた。

「ここにいる十数名から始まった国王への反抗は、今では城下では五百を超え、国内では五千にのぼるさぁ……」

突如として語り出したハンコックに戸惑う者は少なくない。それでも口を開く者はおらず、皆一様に静観に徹している。

「レジスタンスを名乗っても一般市民の俺たちには制御が難しくなってきているさね」

「それは……！」

「事実さぁね」

組織は巨大になる程末端の制御が難しくなるのは明白だ。事実最近になって国軍兵を闇討ちするなどという事件が起き、数人のレジスタンスの末端員が摘発されている。

しかしハンコックはそれを責める気は無かった。

当初より遥かに人数が集まったのは確かだが、ある程度のリスクを想定していないわけではなかったからだ。

「まぁ今回幹部である君たちに緊急招集をかけたのはそれにも関連してて。本物のリーダーから連絡が来た」

ざわりと空気が揺れる。戸惑いよりは期待、切望、希望。

空気が変わった。

5―3

本物と言ったようにハンコックがレジスタンスの本当のリーダーでないことは周知の事実であった。設立当初からハンコックが頭に立ち、皆を纏めていたことからメンバーはその手腕を認めると共に納得していたのだ。

しかし最近入ったばかりのハンコックを知らない血気盛んなメンバーたちの中には、仮とは言え自分たちより若いリーダーを認めず、勝手な動きをする面子が増えてきていた。

そんな中での本物のリーダーの登場である。宮廷のざわついた時期も被り期待値は振り切れていた。

「ところで」とハンコックは手を打った。

「実は手紙で『今日行くからよろしくっ☆』とだけあったから俺もリーダーが誰かわからないんさぁ」

気の抜けた告白と打ち鳴らされた手の音に幹部たちの気合いも一緒に抜ける。張り詰めたような空気が一気に霧散した。

「それって、ハンクもリーダーの顔を知らないってことか？」

「顔どころか、人となりもいまいちさぁね」

しれっと答えるハンコックにガクガクと肩を落とす音が聞こえそうな室内。その室内に地下への階段を下る足音が反響した。

足音は一つ。この場所を知っているのは各地方に散らばって集合できなかった数人の幹部だけである。家主のラズでさえ、自らの宿の

地下にこのような部屋が存在することを知らない。
足音に素早く反応した男が二人、入口の脇に武器を構えて控える。
また一人はもう一つの地上直通の非常用出口に張り付き、いつでも脱出可能との合図を手で送った。それ以外のメンバーはおとなしく息をひそめて侵入者を待つ。
仲間であれば合言葉と合図がある。不埒者であれば拠点を知っている幹部の誰かが襲われたか裏切ったかだ。出来れば後者は考えたくない。幹部の誰かであってくれと内心祈りながらその時を待つ。
ギッと扉のきしむ音がして予告なく開かれる。
――敵！
幹部の心が一つになって侵入者を迎え入れる。
そして開けた扉から足音もひそめず堂々と侵入しようとする不埒者の喉元と腹部に脇に控えていた二人は剣を添えた。
「わっ？」
「イズミぃっ？」
どこか場違いな風にのんきに驚いて見せたのはここ二週間ほど滞在しているイズミその人であった。
思わずと言ったようにハンコックは声をひっくり返して驚く。
「ハン……この人たち何事？」
心底理由が分かりませんという風を装っているのか、タオルで覆っ

た頭を掻いて困惑した様子を見せる。
いや装っているようには見えない。いったい何なんだと混乱した頭ではなく、一度深呼吸して冷やした頭にハンコックは戻した。
イズミの正体は本人の口から聞いていた。真祖の血を引くものであると……。その目的は不明だが、イズミの心を探る力についても教えられた。
ここで問題にするのはイズミのはぐらかされていた真の目的か――？　いや、それも重要だが後に回した方が良い。うかつにこの場で触れられることではないだろう。ならば、やはり。
「イズミどうしてこの場を知っているさ」
喉元からは刃を引かせるが、腹部の剣はそのままに指示を出す。危険は最小限に……鉄則だ。
「ハンを探していて、ラズがここだろうって」
快く教えてくれた、との回答に目を剥いたのはハンコック一人ではないだろう。
幹部以外に、ラズでさえ知らないと思っていた地下部屋の存在を知られていたのだ。恐らくレジスタンスの拠点として使っていることまでは知られていないだろうが、何か悪さしているのだろうなくらいの考えで見られていたに違いない。
今後の活動を考えれば由々しき問題である。
「僕を探していた？」
「そうハンを」
「何さ？」

そんなに急ぎの用事でもあったのだろうか。
「その前にさ、ここの人たちの戦闘態勢解かない？」
周囲にはハンコックを守るように囲むメンバーと、イズミを威圧するように腰に手をやって取り囲むメンバーの二つに分かれていた。イズミに敵意が無いこととハンコックの知り合いということを加味して剣を鞘走らせてはいないが、完全に戦闘態勢である。
「イズミのここに来た理由が分かるまで無理さぁ」
首を振って拒否を示す。
「やだなぁ、ハンってばここに来た理由は先に言ってあったじゃない」
「は？」
「言ってあったというか書いておいた？」
「は……？」
書いて……って。
「まさか」
「わざわざ手紙だしたじゃーん、今日行くからよろしくっ☆てさ」
瞬間、部屋内は凍りついた。幹部陣全員が聞き覚えのあるフレーズにハンコックは絶句した。
「ももももしかして、リリリリリ――」
「ん？　なぁに、仮リーダー。あ、今までありがとねレジスタンスここまで大きくしてくれてさ」

「リーダーァァァァァァァァァァァ！！？？」

「うわぁぁぁぁぁっ？」

「あわわわわわ……っ」

「ギャァァァァァァ」

極めつけの一言に室内は阿鼻叫喚。それまでイズミの腹部に剣を突き付けていた男はすぐさま剣を引いてわたわたとイズミとハンコックを交互に見渡す。

「納得したさぁ……リーダー」

だからあの告白かと、カクリと頭を下げて観念したハンコックは片膝をついて騎士の礼を取った。騒いでいた幹部も同じようにイズミの前に膝を折る。

お知らせ

ここまで読んでいただき感謝しております。
今回長期間に渡って作品の更新が出来ていない状況です。

私事ではあるのですがスランプに加え私生活の方が忙しくなり、少なくとも今年いっぱいは更新がままならなりません。
更新を楽しみに待って下さっている方には大変申し訳ありませんが、来年以降にご期待いただけると幸いです。

この「空の玉座」はなんとしてでも完結させたいと考えておりますので、永久放置ということはしません。ですので、どうか長い目で見守ってください。

何か質問などございましたら、お気軽にメールください。

２０１０．１１．１０　雨木　拝

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1820m/

空の玉座

2010年11月14日20時21分発行